大畑遺跡群における旧石器時代資料の研究

－大畑Ｋ遺跡－

2012.1

鹿又喜隆　馬目勝典　編著

原色図版　大畑Ｋ遺跡出土資料　Scale=1:1

Color plate　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site

目　次

目次・図版目次……iii
例言……v

第１章　遺跡と発掘調査の概要
第１節　大畑Ｋ遺跡の概要……1
第２節　発掘調査区と遺物の分布範囲……2

第２章　出土遺物
第１節　主要遺物の概説……4
第２節　遺物組成……8
第３節　所属時期……9

第３章　技術・機能形態学的考察
第１節　スポールの剥離方法……10
第２節　石器の機能……10

まとめ……13

参考文献……14

図版目次

原色図版１　大畑Ｋ遺跡出土資料……i
図版１　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区東北大発掘区北側採集資料……17
図版２　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区東北大発掘区北側採集資料……18
図版３　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区採集資料……19
図版４　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区（造成中）採集資料……20
図版５　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区（造成中）採集資料……21
図版６　大畑Ｋ遺跡Ⅰ区・いわき市発掘区付近採集資料……22
図版７　大畑Ｋ遺跡Ⅰ区北側採集資料……23
図版８　大畑Ｋ遺跡Ⅰ区（左上）・Ⅱ区（右上）およびⅤ区（下）の採集資料……24
図版９　大畑Ｋ遺跡Ⅴ区採集資料……25
図版10　大畑Ｋ遺跡の使用痕分析……26
図版11　大畑Ｋ遺跡の使用痕分析……27
図版12　大畑Ｋ遺跡の使用痕分析……28

写真図版

写真図版 1　大畑 K 遺跡Ⅵ区東北大発掘区北側採集資料……29
写真図版 2　大畑 K 遺跡Ⅵ区東北大発掘区北側採集資料……30
写真図版 3　大畑 K 遺跡Ⅵ区東北大発掘区北側（上）、Ⅵ区北側（下）採集資料……31
写真図版 4　大畑 K 遺跡Ⅵ区南東（上）、Ⅵ区西（中）、Ⅵ区造成中（下）採集資料……32
写真図版 5　大畑 K 遺跡Ⅵ……33
写真図版 6　大畑 K 遺跡Ⅵ区造成中採集資料……34
写真図版 7　大畑 K 遺跡Ⅰ区いわき市発掘区周辺（上）とⅠ区北側斜面（下）の採集資料……35
写真図版 8　大畑 K 遺跡Ⅰ区北側斜面の採集資料……36
写真図版 9　大畑 K 遺跡Ⅰ区（左上）、Ⅱ区（右上）およびⅤ区（下）の採集資料……37
写真図版 10　大畑 K 遺跡Ⅴ区採集資料……38

挿図・挿表

図 1　大畑 K 遺跡の位置……1
図 2　大畑 K 遺跡の調査範囲……2
表 1　大畑 K 遺跡の地点別石器組成……3
表 2　大畑 K 遺跡の地点別石材組成……3
表 3　大畑 K 遺跡の器種別石材組成……8
表 4　スポールの刃角と補角……11
表 5　石器の使用痕……12
付表 1　石器観察表……15
付表 2　石器観察表……16

表紙写真　大畑遺跡群から北西に臨む湯の岳（手前）と水石山（奥）（馬目勝則氏撮影）

例　言

1　本書は、福島県いわき市、大畑K遺跡（大畑遺跡群K地点）の採集資料に関する研究報告・資料集である。本遺跡は、現在、大畑F遺跡として登録されている。これまで本遺跡は、現地説明会では、大畑遺跡K地点と呼ばれたが、直後（1974～1975年）の福島県考古学会や日本考古学年報での報告では大畑K地点遺跡と呼ばれている。1976刊行の『いわき市史』では、大畑遺跡K地区と記述された。1991年に刊行された『大畑遺跡群の概要』によれば、大畑F遺跡の説明の中に「大畑F遺跡は、県道をはさんだ須賀蛭C遺跡の延長上の丘陵部に位置する。ここから200m程南側の畑地が、旧石器時代の石器群を出土した大畑K遺跡である」と記載されている。この記述からK遺跡とF遺跡は別の遺跡として認識されているようである。しかし、かつての調査範囲から判断すれば、K遺跡は現在のF遺跡に相当する。また、1996年に刊行された『福島県の遺跡地図』には、大畑K遺跡の範囲は記されていない。今回、大畑K遺跡として報告する資料は、主に大畑F遺跡の範囲に該当するが、一部は道路を挟んで北側の須賀蛭C遺跡に含まれる。

2　本資料は、1974年頃から馬目勝典によって採取されたものである。

3　本文および実測図の作成と写真撮影は、すべて鹿又喜隆がおこなったため、その文責も鹿又にある。

4　本論の執筆にあたり、下記の方々に御指導・御助言をいただいた。
会田容弘、阿子島香、大場正善、小野章太郎、鴨志田篤二、佐久間光平、佐野勝宏、鈴木素行、傳田惠隆、森嶋秀一、橋本勝雄、藤原妃敏、松本友之、馬目順一、村上裕次、柳田俊雄

5　本論は、平成２３年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金　若手研究（B）「トライボロジーによる石器機能推定の高確度化とその応用による先史狩猟採集民研究」研究代表者：鹿又喜隆、課題番号：23720376）の研究成果の一部である。

第1章　遺跡と発掘調査の概要

第１節　大畑Ｋ遺跡の概要

大畑Ｋ遺跡は、福島県いわき市泉町下川字大畑に所在する（**図 1**）。藤原川流域の小名浜平地と鮫川流域の勿来平地の間にある、阿武隈山地から海岸部へ突き出した丘陵上に位置する。

1957 年に永山亘によってナイフ形石器が採取されたことを契機に、大畑遺跡群では 8 地点から旧石器時代の遺物が確認されている（福島県立博物館 1999）。出土石器については、原川虎夫・原川雄二・山内幹夫（1983）によって紹介されている。

Ｋ遺跡は、1974 年 7 月 25 日から 8 月 31 日まで（のべ 38 日間）、いわき市教育委員会によって発掘調査が実施された（いわき市教育委員会 1974）。その中でⅥ区については 8 月 18 日から 4 日間、東北大学の芹沢長介教授（当時）と学生 8 名が発掘調査を担当している。調査は約 5000㎡の範囲を 3 × 3m グリッドに区画し、Ⅰ～Ⅵの調査区が設定された（**図 2**）。調査後、出土資料はいわき市教育委員会にて整理されているが、発掘調査報告書は未刊である。これまでに紹介されたＫ遺跡の旧石器時代資料の概要は以下の通りである（いわき市地域学会出版部編集委員会 1991）。

第 1 ユニット：粘土層最上面からメノウを主体とする剥片・砕片が出土。

第 2 ユニット：粘土層上面から流紋岩を主体とする石核・剥片・ハンマーストーンが約 2m の範囲から出土。主な石器は、切出形ナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンド・スクレイパーである。

第 3 ユニット：粘土層最上面から約 70cm 下層で検出。流紋岩を主体とする石核・剥片・ハンマーストーン・局部磨製石斧などが出土。石核は両極打法によるもの。チョッピングトゥール状の石核もここに含まれると予想される。

第３ユニットが最も古く、それに第２ユニット、第１ユニットの順で新しくなる変遷と考えられている。馬目氏の記録によれば、大畑Ｋ遺跡では、発掘直後の昭和 49 年末にⅥ区が削平された。その後も断続的に遺跡周辺の削平が続く。昭和 54 年の第２次石油ショックで工事が中断したものの、昭和 60 年頃までにⅠ～Ⅵ区の南側台地が削平された。さらに昭和 61 年３月 16 日の採集日を最後にⅣ・Ⅴ区が削平され、

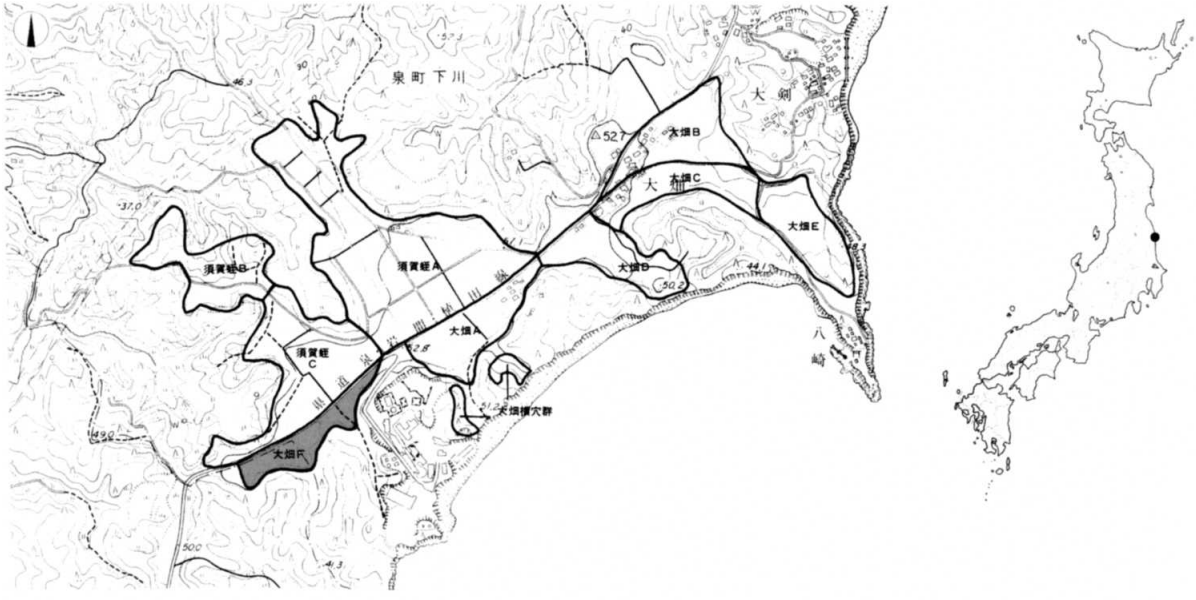


図１　大畑Ｋ遺跡の位置　（いわき市教委 1991 に加筆 .1/50,000）

Fig.1　Topographical map of the Ohata-K site

Ⅰ～Ⅲ区だけが残ったが、フェンスに囲まれ立入禁止となり、その後削平されてK遺跡はゴルフ場開発によって完全に壊滅した状況である。

第2節　発掘調査区と遺物の分布範囲

馬目勝典氏の表面調査によれば、旧石器時代資料は、Ⅰ・Ⅱ・Ⅴ・Ⅵ区とその北側から出土している。本論では、遺物の出土地を、Ⅰ区北側斜面、Ⅰ区いわき市発掘区周辺、Ⅱ区、Ⅴ区、Ⅵ区東北大発掘区北側、Ⅵ区東南端（台地端部）、Ⅵ区造成中、Ⅵ区発掘区西側、Ⅵ区北側に区分して記載する。多くの資料は、馬目氏によって出土地が記録されている。今回は、馬目氏が収集した膨大な資料の中から、旧石器時代に該当する可能性がある石器99点を鹿又が抽出し、報告する。その内訳は、Ⅰ区北側斜面5点、Ⅰ区いわき市発掘区周辺10点、Ⅱ区2点、Ⅴ区20点、Ⅵ区東北大発掘区北側24点、Ⅵ区東南端（台地端部）1点、Ⅵ区造成中32点、Ⅵ区発掘区西側2点、Ⅵ区北側3点である（**表1**）。なお、「Ⅵ区造成中」とした資料は、Ⅵ区全域の造成工事中に出土した遺物群であり、縄文時代の資料を含めて、大量に採集されたものである。したがって、Ⅵ区の中での出土位置は不明である。馬目氏が収集した資料には、膨大な量の流紋岩、メノウ、チャートなどの剥片・砕片が含まれるが、それらの所属時期を判定することは難しい。発掘調査の状況からも、遺跡内での石器製作活動を推察でき、旧石器時代の資料も多いと予想される。抽出した資料中の石材組成を地点ごとに示すと、地点ごとに石材の組成に違いがある（**表2**）。

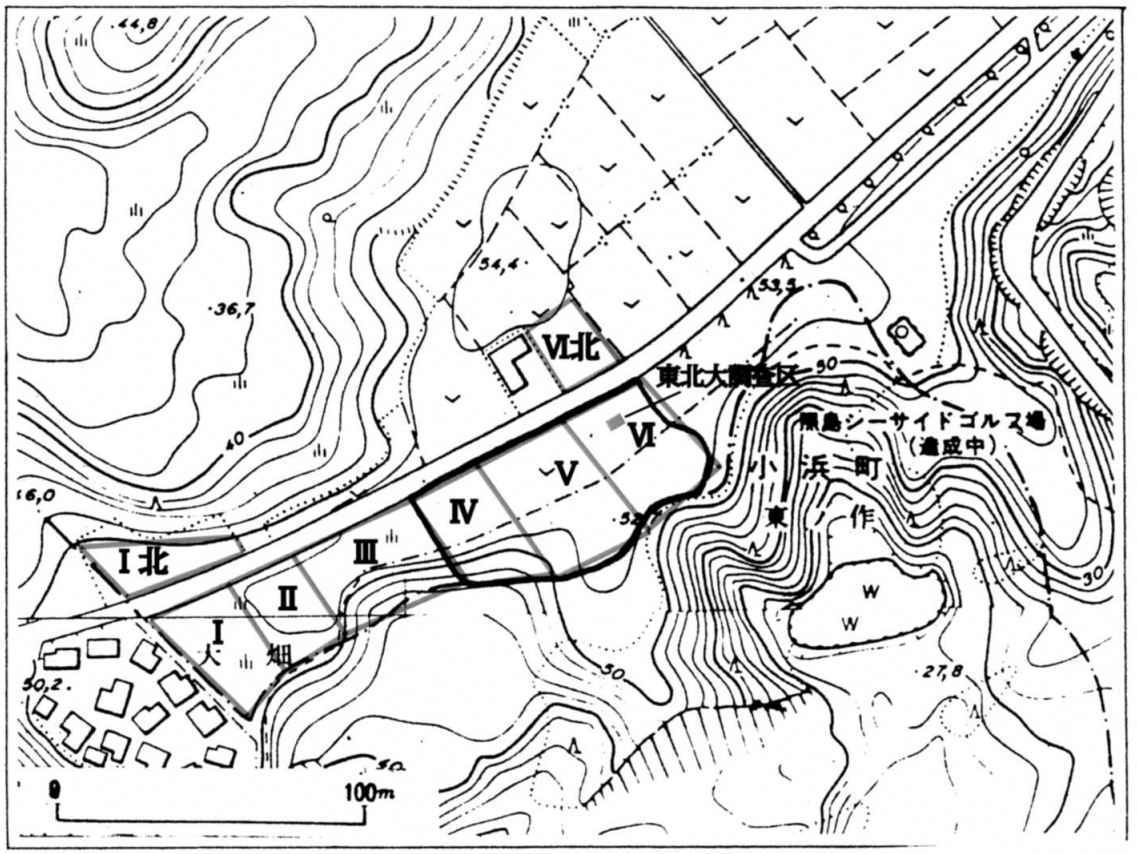


図2　大畑K遺跡の地形と調査区（いわき市教委1982に加筆）

Fig.2　Topographical map of the Ohata-K site and excavated squares

表 1　大畑 K 遺跡の地点別石器組成

Tabale 1. Assemblage of lithic artifacts by square.

器種／地点	Ⅰ区北	Ⅰ区いわき市	Ⅱ区	Ⅴ区	Ⅵ区造成中	Ⅵ区東北大	Ⅵ区北	Ⅵ区南東端	Ⅵ区西	総計
エンド・スクレイパー		1								1
スポール				1	1	11				13
ナイフ形石器		1			1	1				3
ハンマー					1					1
石核	3				2	1				6
石刃		1	2	4	3				1	11
尖頭器				1		1	2			4
尖頭器(未)				1	1		1			3
台形様石器					1					1
彫刻刀形石器		1			2	2				5
二次加工ある剥片		2		1				1	1	5
剥片	2	3		8	14	8				35
剥片(楔)				1	4					5
楔形石器		1		3	2					6
総計	**5**	**10**	**2**	**20**	**32**	**24**	**3**	**1**	**2**	**99**

表 2　大畑 K 遺跡の地点別石材組成

Tabale 2. Assemblage of materials by square.

石材／地点	Ⅰ区北	Ⅰ区いわき市	Ⅱ区	Ⅴ区	Ⅵ区造成中	Ⅵ区東北大	Ⅵ区北	Ⅵ区南東端	Ⅵ区西	総計
チャート	2			1	5					8
メノウ		3		4	8			1	1	17
安山岩	1	1		1	1					4
凝灰質頁岩			1	2	2					5
玉髄					2					2
珪質凝灰岩	1			1						2
珪質頁岩(硬質)		4		7	5	18	2		1	37
黒曜石			1			2				3
砂岩					2					2
石英		2		2	2	1				7
碧玉				1						1
流紋岩	1			1	5	3	1			11
総計	**5**	**10**	**2**	**20**	**32**	**24**	**3**	**1**	**2**	**99**

第2章 出土遺物

第１節　主要遺物の概説

（1）Ⅵ区東北大発掘区北側

石器組成は、スポール 11 点、ナイフ形石器１点、石核１点、尖頭器１点、彫刻刀形石器２点、剥片８点である。石材は、珪質頁岩 18 点、チャート２点（折面接合により１点になる）、流紋岩３点、石英１点である。珪質頁岩やチャート製の資料はユニット２と関連する可能性が高い。また、流紋岩製のチョッピングトゥール状の石核や石英製の大型剥片はユニット３に関連し、発掘資料と一体となるものと予想される。

①ナイフ形石器

図版 1-1、写真図版 1-1：背面先端側の一縁辺を残し、二側縁を加工する。腹面側は基部の右側を中心に平坦剥離により整形される。腹面の二次加工の後に背面側に調整が加えられる。先端部は僅かに欠損している。

②尖頭器

図版 1-2、写真図版 1-2：小型かつ薄手の尖頭器である。被熱痕がある。

③彫刻刀形石器

図版 1-3、写真図版 1-3：不整形な剥片を素材とする。右肩に彫刻刀面（burin facet）が形成される。先端側に複数の剥離があり、楔形石器に分類される可能性もある。

図版 1-4、写真図版 1-4：背面左肩に彫刻刀面を設けている。背面先端部には、抉り込んだ二次加工部分があり、それを打面として彫刻刀面が形成されている。最も古いファシットを切る二次加工があり、さらにその二次加工は２枚の彫刻刀面によって切られていることから、刃部再生の工程が類推できる。

④スポール

図版 1-5、写真図版 1-5：彫刻刀形石器あるいは有樋尖頭器のスポールである。断面は平行四辺形を呈する。スポール剥離の前に、スポール背面左側に二次加工が加えられる。

図版 1-6、写真図版 1-6：他のスポールとは異なり、幅広のスポールである。剥離前の調整は前ファシット側から素材腹面側に向けて施されている。一見、細石刃核のスキー状スポールに似るが、打面形状が異なり、他のスポールと同様のものと考えられる。

図版 1-7、写真図版 1-7：旧ファシット側から素材の腹面に向けて二次加工が施され、その後剥離されている。剥離後に、腹面左側縁に微小剥離痕が生じていることから、スポール自体が使用された可能性もある。

図版 1-8、写真図版 1-8：スポール剥離前に二次加工が施されている。スポール剥離が失敗したのか、スポールの先端側からのファシットが各面に形成されている。

図版 1-9、写真図版 1-9：スポール剥離前に調整加工が施されない。彫刻刀形石器の左肩から剥離されたものである。

図版 1-10、写真図版 1-10：素材腹面側から彫刻刀面内に向って、細かな調整加工が連続的に施される。素材の左肩から剥がされたものである。図版 1-11 ～ 14（写真図版 1-11 ～ 14）も同様な資料である。

図版 1-15、写真図版 1-15：素材腹面から彫刻刀面内に向って、連続的な調整が施され、スポールが剥離された。中央部に挟雑物があり、それがもとで、不規則な割れが生じている。

⑤剥片

図版 1-17、写真図版 1-17：打面と背面の成す角度が急であり、打面調整や頭部調整が顕著であることから、尖頭器製作過程で生じた剥片、いわゆる「ポイントフレイク」と考えられる。**図版 1-16、写真図版 1-16** と折面で接合する。肉眼観察ではチャート製に見えるが、風化の進んだ黒曜石製である可能性もある。

図版 2-3、写真図版 2-2：石英製の大型剥片である。背面には四方からの剥離面がみられる。

図版 2-4、写真図版 2-5：背面に自然面を残す大型の剥片である。打面には複数の剥離面が見られ、打面と作業面の転移が確認される。

⑥石核

写真図版 3-1：背面に自然面を残す大型の剥片を素材にし、両面の周辺から剥離を行ったもの。チョッピングトゥール状になる。

(2) Ⅵ区北側

尖頭器３点が出土した。完成品の尖頭器は珪質頁岩製、未製品は流紋岩製である。いずれも厳密な時期の特定は難しい。

図版 3-1・写真図版 3-2：両面加工の尖頭器である。図の右面の整形のあと、左面を加工している。未製品と考えられるが、半ばほどで欠損し、先端側が残る。

図版 3-2、写真図版 3-3：両面加工の尖頭器である。被熱痕が見られる。

図版 3-3、写真図版 3-4：尖頭器の初期段階の未製品と考えられるが、あるいは石鏃の未製品の可能性もある。被熱している。

(3) Ⅵ区南東端（台地端部）

図版 3-4、写真図版 4-1：メノウ製の剥片を素材に、腹面側から連続的な二次加工が加えられた石器である。スクレイパーの可能性もあるが、不整形である。大畑Ｋ遺跡では、メノウを用いた石器製作がおこなわれているが、定型的なトゥールが少ない。

(4) Ⅵ区発掘区西側

図版 3-5、写真図版 4-2：珪質頁岩製の石刃である。

図版 3-6、写真図版 4-3：メノウ製の剥片の基部側に二次加工を施した石器。

(5) Ⅵ区造成中

台形様石器、ナイフ形石器、尖頭器未製品、スポール、ハンマーが各１点、彫刻刀形石器、楔形石器が２点、石刃３点など 32 点がある。石材は珪質頁岩、チャート、メノウ、流紋岩、玉髄、石英、砂岩、凝灰質頁岩、安山岩など多様である。造成工事中にⅥ区の広い範囲から縄文時代を含めた遺物と共に採集されたものであり、複雑な所属時期を反映している可能性が高い。

①台形様石器

図版 3-8、写真図版 4-1：背面の基部両側に二次加工を加え、整形している。チャート製。他の時期のトゥールの未製品である可能性を残す。

②ナイフ形石器

図版 3-7、写真図版 4-5：不整形の素材剥片の打面側に、腹面から二次加工を施した石器である。先端部が折れているが、ナイフ形石器であろう。

③尖頭器

図版 3-9、写真図版 4-6：尖頭器の初期段階の未製品であり、素材面を残す。流紋岩製。

④彫刻刀形石器

図版 3-10、写真図版 4-7：三角形の剥片を素材に、その打面側から右肩に彫刻刀面が形成されている。末端側にも横方向の細長い剥離面がある。

図版 4-1、写真図版 4-8：上部両肩から彫刻刀面が形成される。楔形石器の可能性もある。

⑤スポール

図版 4-2、写真図版 4-9：素材腹面側から彫刻刀面内に向って、細かな調整加工が連続的に施される。素材の左肩から剥がされたものである。

⑥楔形石器とその剥片

図版 4-3、写真図版 4-10：両面にポジ面を残し、それぞれの剥離方向が対向する。楔形石器から生じた剥片と判断した。

図版 4-4、写真図版 4-11：四方に上下からの剥離面を残す楔形石器である。

図版 4-6、写真図版 4-13:背面右側には、連続的な剥離痕があり、それを切る形でこの剥片が取られている。腹面には上下から生じたリングがあり、両極打撃によって割られたと考えられる。

図版 4-7、写真図版 5-1：腹面に上からの剥離がみられ、側面に抜けている。

図版 4-8、写真図版 5-2：上下からの剥離面が多くあり、楔形石器あるいは、それから剥がれた剥片に分類される。

⑦石刃

図版 4-10・11、写真図版 5-3・4：流紋岩製の石刃。基本的に単設打面である。

⑧剥片

図版 4-12・5-1、写真図版 5-5・5-11：打角や背面構成からポイントフレイクと考えられる。打面が極めて小さい。

⑨石核

図版 5-8、写真図版 6-4：チャート製の石核。上下からの剥離が 4 面にみられる。広い打面があるため、楔形石器では無く、石核と判断した。

図版 5-9、写真図版 6-3：主に上下に打面を設置した石核。それ以前には、別方向からの剥離面をもつことから、繰り返される打面・作業面転移によって小型化したもの。

(6) Ⅰ区いわき市発掘区周辺

ナイフ形石器、彫刻刀形石器、エンド・スクレイパー、石刃が各 1 点と、楔形石器や二次加工ある剥片などで構成される。トゥールは珪質頁岩製、その他はメノウや石英、安山岩製である。

図版 6-1、写真図版 7-1：二側縁加工のナイフ形石器である。背面基部側の二次加工は抉り込まれた状態であり、切出形を呈する。先端部が僅かに欠損し、先端両面に小さな剥離面が生じている。

図版 6-2、写真図版 7-2：折断された剥片を素材に、末端側左肩（折面）に彫刻刀面が形成されている。

図版 6-3、写真図版 7-3：平坦打面から剥離された石刃。

図版 6-4、写真図版 7-4:背面末端部に二次加工を施し、刃部を丸く整形している。基部側が欠損している。

図版 6-5・写真図版 7-5：横長の剥片を素材に周辺加工が施される。尖頭器の未製品の可能性もある。

(7) Ⅰ区北側斜面

Ⅰ区北側斜面から出土した石器は、他の地点とは異なり、やや古い時期の様相を示す。特定の剥片剥離

技術の存在も伺えず、概して大型の剥片と石核で構成される。風化が進行し、パティナの発達もみられる。石材も珪質頁岩や黒曜石が含まれない。

図版 7-1、写真図版 7-11：自然面打面の厚手の剥片。パティナが発達する。流紋岩製。
図版 7-2、写真図版 8-1：打面と背面に自然面をもつ大型剥片。風化が激しい。
図版 7-3、写真図版 8-2：一撃の剥離によって３面に分かれて剥離が進行している。チャート製であるが、他の資料よりもパティナが発達している。
図版 8-1、写真図版 9-1：礫に一撃の剥離を加えた石核。チャート製。

(8) Ⅱ区

僅かに二次加工が施された黒曜石製石刃（**図版 8-3、写真図版 9-3**）と一側縁に二次加工のある石刃（**図版 8-2、写真図版 9-2**）の２点がある。ナイフ形石器にも分類できるかもしれないが、いずれにせよ典型的なナイフ形石器では無い。黒曜石は含有物の特徴や色調から、高原山産の可能性を指摘できる（森嶋秀一氏の御教示による）。

(9) Ⅴ区

尖頭器２点、スポール１点、楔形石器３点、石刃４点などで構成される。石材は、珪質頁岩を主体にメノウ、凝灰質頁岩、石英などから成る。
図版 8-4、写真図版 9-4：石英製の小型尖頭器である。素材面を残す。二次加工は押圧剥離の可能性もあり、縄文時代に属することも考えられる。
図版 8-5、写真図版 9-5：珪質頁岩製の尖頭器である。被熱しているが、加工が丁寧では無く、未製品であろう。この資料も縄文時代に帰属する可能性がある。
図版 8-6、写真図版 9-6：腹面の右側と末端に連続的な剥離痕がある。両面加工の初期段階とも考えられるが、形状から楔形石器に分類した。
図版 8-7、写真図版 9-7：縦長剥片を素材にして、背面右側辺に二次加工が施される。その後、特に下端から両面に複数の剥離面がみられる。
図版 8-8、写真図版 9-8：上下からの複数の剥離面が確認される。両極打撃によって生じた割れであり、楔形石器に分類される。
図版 8-9、写真図版 9-9：左肩から剥離されたスポールである。縁辺に急斜度の調整加工が施された後に剥離されている。被熱痕跡がみられる。
図版 8-10、写真図版 9-11：小型の石刃。背面右側に自然面を残す。
図版 9-1、写真図版 10-1：石英製の石刃である。末端部に自然面を残す。打面は平坦打面である。一部に二次加工の剥離面があるが、ガジリの可能性もある。

第２節　遺物組成

（1）器種組成

本論では、石器 99 点を馬目氏のコレクションから選び出した。トゥールや、時期を判断できそうな資料を主に選択した。その内訳は、ナイフ形石器 3 点、尖頭器 4 点、尖頭器未製品 3 点、彫刻刀形石器 5 点、エンド・スクレイパー 1 点、スポール 13 点、台形様石器 1 点、楔形石器 6 点、楔形石器から生じた剥片 5 点、石刃 11 点、二次加工ある剥片 5 点、剥片 35 点、石核 6 点である。出土地点別の点数は表 1 に示した通りである。主体はⅥ区であり、その中に幾つかの集中地点があったと推定される。主要な石器は尖頭器状のナイフ形石器や二側縁加工のナイフ形石器、尖頭器、彫刻刀形石器、エンド・スクレイパーであり、後期旧石器時代後半のいわゆる「砂川期」に相当する時期の所産と考えられる。楔形石器やチョッピングトゥール状の石核など、時期を限定するには至らないが、大畑 K 遺跡の発掘資料と関連するため、発掘調査の内容が明らかになれば、自ずとその位置付けは定まってくる。また、Ⅰ区北側の遺物は、それらよりも古手の可能性がある。

（2）石材組成

大畑 K 遺跡では、器種毎に使用石材が異なる（**表 3**）。スポールとエンド・スクレイパーでは珪質頁岩が 100％を占める。ナイフ形石器や彫刻刀形石器、尖頭器、石刃でも珪質頁岩の割合が高い。一方で、石核、剥片、楔形石器など、遺跡内での石器製作に関わる資料では、流紋岩やチャート、メノウ、安山岩、珪質凝灰岩、石英など多様である。おそらく時期差のある複数の石器群を内包するため、多様な石材構成となっている。それらの石材には、在地の流紋岩以外に、珪質頁岩（東北地方日本海側産）や、黒曜石（高原山産？）、安山岩（大洗海岸付近）、メノウ（鬼怒川流域）、石英（阿武隈山地内陸部）など、近隣では採取できない多様な由来をもつ石材で構成される。石器群をもたらした人々の広域な遊動領域などを反映する貴重な情報である。

表 3　大畑 K 遺跡の器種別石材組成

Tabale 3. Assemblage of lithic artifacts by material.

石材／器種	エンド・スクレイパー	スポール	ナイフ形石器	ハンマー	石核	石刃	尖頭器	尖頭器（未）	台形様石器	彫刻刀形石器	二次加工ある剥片	剥片	剥片（楔）	楔形石器	総計
チャート					3					1		4		2	10
メノウ					1					1	4	6	3	2	17
安山岩												4			4
凝灰質頁岩						1						3		1	5
玉髄			1						1						2
珪質凝灰岩					1							1			2
珪質頁岩(硬質)	1	13	2			6	3	1		3		6	1	1	37
黒曜石						1									1
砂岩												2			2
石英				1		1	1				1	3			7
碧玉												1			1
流紋岩					1	2		2				5	1		11
総計	**1**	**13**	**3**	**1**	**6**	**11**	**4**	**3**	**1**	**5**	**5**	**35**	**5**	**6**	**99**

第３節　所属時期

本資料は、採集品であるために、その所属時期を厳密に決定することは難しいが、かつて調査された大畑Ｋ遺跡の調査事例を参考にすれば、所属時期の傾向を示すことが出来る。二側縁加工ナイフ形石器や尖頭器状のナイフ形石器、彫刻刀形石器、尖頭器、スポール、エンド・スクレイパーなどのトゥールを含む石器群は、発掘調査の成果によれば、第２ユニットに属する可能性が高い。典型的な出土遺物の内容から、類似する遺跡を探せば、千葉県取香和田戸遺跡第２文化層（小久貫・新田 1994）や三崎三丁目遺跡第２文化層（道澤明 2000）があげられる。その他にも、千葉県平賀一ノ台遺跡（道澤 1986）、東内野遺跡（岡本ほか 2003）、栃木県多功南原遺跡（山口 1999）、群馬県富田下大日遺跡第１文化層（津島 2008）、今井三騎堂遺跡第２文化層（岩崎 2004）、茨城県細原遺跡（館野・瓦吹 1982）などがあげられる。これらは「東内野」あるいは「男女倉」型尖頭器が特徴である。年代的には「砂川期」に相当するか、一部はそれよりも僅かに古いと言われることが多い。そのような事例から、大畑Ｋ遺跡の主なトゥールを含む石器群は、ほぼ「砂川期」相当と考えて良いだろう。年代的には、群馬県富田下大日遺跡第１文化層の放射性炭素年代（20,020 ± 70、19,790 ± 60、19,670 ± 60BP）から判断して、20,000 ～ 19,000BP と予想される。これらは、22,000 ～ 21,500calBC に較正されるため、約 24,000 ～ 23,500 年前と言える。また、東北地方では、福島県学壇遺跡群Ｄ地区（西村・秦・関 1995）、青森県大平山元Ⅱ遺跡（三宅・横山ほか 1980）が類似する。後者では「大平山元Ａ技法」が提唱されており、特徴的なスポール剥離技術がみられる。本資料は、関東地方と東北地方の石器群の関連を探る上でも重要な地理的位置にある。

発掘調査の第１ユニットでは、メノウを中心とした石材組成である。今回の報告資料にもメノウ製の厚手のスクレイパーが含まれている。また、大型の剥片やチョッピングトゥール状の石核を含む、流紋岩や石英を主体とする資料の一部は、局部磨製石斧が出土した第３ユニットに関連し、後期旧石器時代前半期に属するものであろう。Ｉ区北側斜面の資料は時期幅が限定できそうだが、より古い時期の特徴を示す。

第3章　技術・機能形態学的考察

第1節　スポールの剥離方法

本資料には、スポール13点が含まれている。トゥールの数量よりも多く、一定の傾向を把握できる。本資料のスポールは、彫刻刀形石器や有樋尖頭器の両者から剥離された可能性があるため、ここでは元の石器を仮に「素材」と呼ぶことにする。

スポールは全て素材の左肩から剥離されたと考えられる。また、1点を除き、スポールの剥離前に、素材の腹面から連続的な調整加工が施される。1点の例外は、標準的な彫刻刀スポールであり、剥離方法が異なる。この調整加工によって、縁辺角度がより鈍角化する(**表4**)。その角度は平均で約54°である。(なお、角度は、縁辺3箇所の角度の平均で示している。) 旧縁辺の角度が分かるものは1点のみだが、そのスポール（F1-11）では50.5°であった縁辺角が、調整加工によって61.3°に変化している。つまり、約10°鈍い縁辺に変化した。この調整加工は、スポール剥離のために準備と考えられる。さらに、スポールの剥離によって形成された新たな縁辺角度の平均値は、62.3°である。ここでも角度は約8°鈍くなる。このように考えると、素材の形態は、縁辺が徐々に鈍角化していき、さらに素材は約4mm（スポール厚の平均値）ずつサイズが減少する。したがって、1つの素材から剥離されるスポールの数は、数個程度が限界であると予想される。

大畑K遺跡と同様のスポールの接合資料は、細原遺跡（舘野・瓦吹1982）や今井三騎堂遺跡第Ⅱ文化層（岩崎2004）で確認されている。細原遺跡では、東内野型尖頭器への接合資料以外に、79点のスポールが出土した。使用石材も頁岩が多用され、大畑K遺跡との類似性が指摘される。それらの特徴を記すと、スポールは、①左肩であり、②片面加工と両面加工の比率は、9対1、③素材剥片の打面側にスポールの打点があるものが60%、末端側にあるものが40%、④1回目の樋状剥離と2回目以降の割合は、7.5対2.5である。また、スポール自体を石器素材として利用した事例が2点確認されている。これらの特徴は、大畑K遺跡のスポールにほぼ共通する。

一方、今井三騎堂遺跡第Ⅱ文化層の使用石材は、黒曜石を主体に碧玉（褐色、赤色）が伴う。黒曜石製には表面の擦れが確認されている。擦れの程度は、剥離面ごとに差があり（多段階表面変化）、石器の持ち運びや使用と、刃部再生の繰り返しによる結果と考えられる。一方、大畑K遺跡では、彫刻刀形石器の出土数が少ないが、おそらく同様の彫刻刀形石器の刃部作出・再生の行為があったと考えられる。使用石材は、遠隔地産のものであるから、使用に伴った刃部再生の比重が高かったと考えられる。今後、類例の分析によって、本器種のライフヒストリーを探っていく必要がある。これらのスポールは、「東内野型」あるいは「男女倉型」の有樋尖頭器から剥離された可能性もあるが、多くは「細原型」彫刻刀形石器から剥離されたものであろう。

第2節　石器の機能

本資料の中でトゥールを中心に使用痕分析を実施した。種別で言えば、ナイフ形石器2点、彫刻刀形石器4点、エンド・スクレイパー1点、スポール13点、合計20点である（**表5**)。分析では、落射照明付金属顕微鏡（オリンパスBX51M）を使用し、100～500倍（主に200倍）で顕鏡した。顕微鏡写真の撮影では、デジタルマイクロスコープシステム（キーエンスVHV-1000）を併用した。使用痕光沢（ポリッシュ）の分類基準は、東北大学使用痕研究チームによる実験研究（阿子島1981、梶原・阿子島1981）および筆者自身の実験研究に基づく。線状痕の方向は、隣接する縁辺に対する傾きによって「平行、斜行、直交」と記載する。

ナイフ形石器2点（図版1-1・6-1）には、先端部に小剥離が認められる（図版10）。その剥離は長軸方向であり、刺突や投射による衝撃剥離痕の可能性があるが、剥離面の長さが0.1～0.3cmほどと小さく、その要因のみに断定することはできない。

エンド・スクレイパー（図版6-4）には、背面末端部の二次加工部分に広く輝斑が認められ、腹面側にも僅かに輝斑が確認された。一方で、刃部の摩滅は無く、使用された痕跡は無い。

スポール13点は、縁辺に微弱な光沢やパッチ状の光沢が幾つか確認された（図版11・12）。しかし、明らかな使用痕と判断できるものは無かった。その理由として、スポールの剥離前になされる調整加工によって、使用痕が除去された可能性があげられる。つまり、この調整が刃部作出などの意図では無く、スポール剥離準備のための調整であることを示していることになる。また、石器表面の各所にみられるパッチ状の光沢は、石器を運搬した最中に石器同士が擦れて生じた可能性がある（鹿又2010）。この点は、群馬県今井三騎堂遺跡第Ⅱ文化層の黒曜石製石器にみられた「多段階表面変化」の状況と符合する部分でもある。遠隔地石材が主として使用されていることからも推測できる。

以上、本分析では、明確に使用痕と断定できる資料は皆無であった。その理由のひとつは、石器の表面状態が観察するには状況が悪く、縁辺の微弱な摩耗やパッチ状の光沢の点在、あるいは輝斑（Bright spot）の点在などのため、微弱な使用痕光沢を確認できなかったためである。一方で、この特徴は石器が長距離を運搬されたことを反映し、石器のライフヒストリーの一端を物語る痕跡である可能性もある。本資料では顕著な使用痕が存在しないことを確認できたが、石器の機能の解明という点では多くの課題が残されたままとなった。

表4　スポールの刃角と補角　（RT: 旧ファシットへの二次加工）
Tabale 4. Edge angles of spalls.

図No.	部位	刃角	再生角	再生による補角	修正角	備考
F1-5	左肩	58.33	126.33	53.67	4.67	RT
F1-7	左肩	55.33	117.67	62.33	-7.00	BR腹面側にRT
F1-8	左肩	56.00	110.33	69.67	-13.67	RT
F1-9	左肩	52.33	121.67	58.33	-6.00	
F1-10	左肩	59.00	122.00	58.00	1.00	RT
F1-11	左肩	50.50	114.00	66.00	-15.50	RTにより刃角は61.3°に変化
F1-12	左肩	48.00	119.50	60.50	-12.50	RT
F8-3	左肩	73.67	96.00	84.00	-10.33	RT
F1-14	左肩	43.67	122.67	57.33	-13.67	RT
F1-13	左肩	51.00	118.50	61.50	-10.50	RT
F1-15	左肩	46.67	126.67	53.33	-6.67	RT
F4-2	左肩	52.33	116.67	63.33	-11.00	RT
平均		53.90	117.67	62.33	-8.43	

表 5　石器の使用痕

Tabale 5. Use-wear on lithic artifacts

図No.	器種	部位	使用の有無	微小剥離痕	備考
F1-1	ナイフ形石器	尖端部		衝撃剥離？ 0.32cm(背面)	
F1-4	彫刻刀形石器	右側辺	明瞭な使用痕なし		BSとD2様？がパッチ状に点々。全体に点々と光沢パッチがあり、ポリッシュタイプの検討は困難。
F6-1	ナイフ形石器	尖端部		衝撃剥離？ 0.13sm（背面）、 0.16cm（腹面）	全体に表面状態が悪い
F1-5	スポール		なし		
F1-6	スポール		明瞭な使用痕なし		全体に点々と光沢パッチがあり、ポリッシュタイプの検討は困難。
F1-2	尖頭器	尖端部		衝撃剥離？ 0.06cm（裏面）	
F8-1	尖頭器	基部		衝撃剥離？ 0.19cm（表面）	
F6-4	エンド・スクレイパー		なし		背面刃部にBS広い。
F1-3	彫刻刀形石器		明瞭な使用痕なし		
F1-7	スポール		明瞭な使用痕なし		軟質のせいか縁辺が丸みを帯びる。
F6-2	彫刻刀形石器		なし		
F3-10	彫刻刀形石器		なし		
F1-8	スポール	背面とファシットの成す縁辺	明瞭な使用痕なし		金属光沢の可能性ある
F1-9	スポール		明瞭な使用痕なし		全体に弱い摩滅。
F1-10	スポール	腹面とファシットの成す縁辺	明瞭な使用痕なし		
F1-11	スポール	腹面とファシットの成す縁辺	明瞭な使用痕なし		RT時の摩滅の可能性あり
F1-12	スポール		なし		
F-3	スポール		不明		被熱のため、表面状態が悪い。
F1-14	スポール		明瞭な使用痕なし		全体に凸部に荒れた光沢とパッチ光沢がある。
F1-13	スポール	腹面とファシットの成す縁辺	明瞭な使用痕なし		稜線の凸部にやや摩滅
F1-15	スポール		明瞭な使用痕なし		縁辺摩滅があり、微弱な光沢は判定困難
F4-2	スポール		明瞭な使用痕なし		縁辺が全体的に摩滅。微弱なポリッシュの判定は困難。

まとめ

大畑K遺跡は、現在は包含層の大部分が消失したと考えられている。このような遺跡であるから、資料の公開は、より重要な意義をもつ。かつて遺跡が存在し、そこに人類の居住痕跡があったことを窺い知ることは今となっては難しくなってしまった。しかし、馬目勝典氏による継続的な分布調査によって、資料の出土位置を知ることができ、この度、資料の公開が可能になった。このような取り組みは、地域史研究としてだけでなく、広く文化財の保護の面でも重要であろう。2011年3月11日の東日本大震災と大津波、そして原発事故の影響を強く受ける当地域であるため、その思いは更に強い。かつて有った文化財をどのようにして守り、伝えるか。そして、その場所に暮らした人々のことを、如何にして知り、後世に伝えるかは歴史学の究極の課題でもある。震災後の情勢によって、文化財保護が軽視されかねない課題も生じている今日である。そもそも、なぜ歴史的資料や文化財が重要であるかを改めて考える機会ともなった。個人的な考えであるが、私たちが伝えたいのは、おそらく故人の「記憶」であろう。しかし、その故人が存在しない今、それを伝えるのは、残された家族や知人を除けば、おそらく故人の所有したモノ以外に無い。津波被災地の写真の価値がそれを端的に物語っている。人間は全てを記憶している訳ではない。しかし、1枚の写真を目にすることで、当時の情景や匂い、人の表情、音声などが鮮やかに蘇ってくる。歴史においても、その契機になるのが、文化財であり、考古資料でもあることが望まれる。それを物語るためには、歴史学的な研究が不可欠である。

大畑K遺跡では、約2.4万年前の人類の活動が明らかになった。石器の石材は、いわき市周辺のみならず、東北地方の日本海側から、関東平野の太平洋岸に至る広い領域から得られた石材で作られている。つまり、彼らはそれだけ広大な領域を移動しながら、暮らしていたのである。石器の技術・形態学的にも東北地方と関東地方に分布する石器群との関連性が指摘できる。主要な活動内容は、狩猟などであろうが、分析資料に認められた使用痕跡からは、明瞭な狩猟行為は窺えない。また、スポールは当遺跡において最も多い石器器種であるが、出土数の多さが彫刻刀形石器を中心とした道具の製作と使用の活動を反映していることから、大畑の地で行われた生業活動の内容を理解する鍵となる器種と考えられる。しかし、本資料の分析のみでは、十分に明らかにできなかった。一方、大畑遺跡群および隣接地の須賀蛭遺跡群では、多くの地点で同様の石器群が確認されている。つまり大畑遺跡群周辺は、約2.4万年前に集中的に利用された土地である。その理由については、今後の継続的な研究を通して明らかにしていきたい。

参考文献

いわき市教育委員会 1974『大畑遺跡 K 地点発掘調査現地説明会資料』

菅原文也 1974「大畑 K 地点遺跡」『福島県考古学年報』4

菅原文也 1975「大畑 K 地点遺跡」『日本考古学年報』第 27　p.33

鈴木重美 1976「第一編考古資料　遺跡概説　一　大畑遺跡 K 地区」『いわき市史』p.12

三宅徹也・横山裕平ほか 1980『大平山元Ⅱ遺跡発掘調査報告書』青森県立郷土館

阿子島香 1981「マイクロフレイキングの実験的研究－（東北大学使用痕研究チームによる研　究報告その１）」『考古学雑誌』66 巻 4 号　pp.1-27

梶原洋・阿子島香 1981「頁岩製石器の実験使用痕研究－ポリッシュを中心とした機能推定の試み－（東北大学使用痕研究チームによる研究報告　その２）」『考古学雑誌』67 巻 1 号　pp.1-36

館野孝ほか 1982『細原遺跡』北茨城市史別巻

いわき市教育委員会 1982『いわき市都市計画区域内埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書（小名浜地区）』

原川虎夫・原川雄二・山内幹夫 1983『東北地方南部阿武隈山地東縁における先土器時代遺跡群』青森オフセット印刷（株）

道澤明 1986『平賀』平賀遺跡群発掘調査会

いわき市地域学会出版部編集委員会（代表馬目順一）1991『新しい　いわきの歴史』いわき市地域学会図書 10

廣岡敏・真保昌弘 1991『大畑遺跡群の概要』（財）いわき市教育文化事業団

小久貫隆史・新田浩三 1994『新東京国際空港文化財発掘調査報告書Ⅷ－取香和田戸遺跡（空港 No.60 遺跡）－』（財）千葉県文化財センター

西村博幸・秦文夫・関亘 1995『学壇遺跡群　南福島ニュータウン埋蔵文化財発掘調査報告』福島市埋蔵文化財報告書第 67 集

福島県立博物館 1999『福島県の旧石器時代遺跡』陽光社印刷（株）

山口耕一 1999『多功南原遺跡』（財）栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター

道澤明 2000「三崎 3 丁目遺跡」『千葉県の歴史　資料編・考古 1（旧石器・縄文時代）』（財）千葉県史料研究財団

千葉県立房総風土記の丘 2002『有樋尖頭器の発生・変遷・終焉』

岡本東三・田村隆・加納実・国武貞克 2003『千葉県史編さん資料　富里市東内野遺跡旧石器時代石器資料調査報告書』千葉県

岩崎泰一 2004『今井三騎堂遺跡（旧石器時代編）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

津島秀章 2008『上武道路・旧石器時代遺跡群（１）』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

鹿又喜隆 2010「更新世最終末の石器集積遺構に含まれる道具の評価―宮城県仙台市野川遺跡の機能研究と複製石器の運搬実験を通して―」『日本考古学』30 号 pp.47-63

付表１　石器観察表

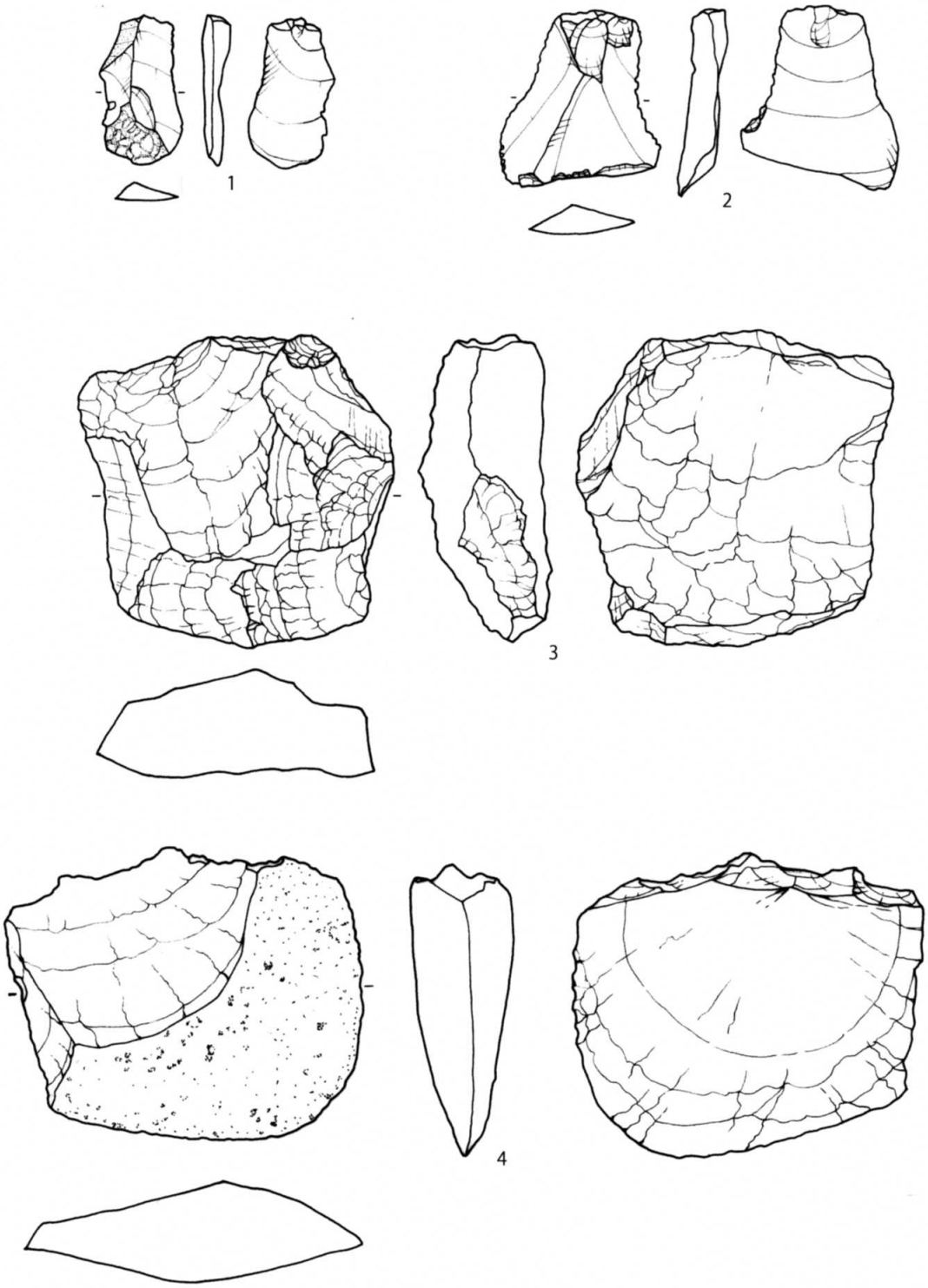
図No.	写真No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	備考
F1-1	P1-1	Ⅵ区東北大発掘区北側	ナイフ形石器	5.71	2.12	0.72	6.83	珪質頁岩(硬質)	衝撃剥離(小)
F1-2	P1-2		尖頭器	4.02	1.13	0.27	1.07	珪質頁岩(硬質)	被熱
F1-3	P1-3		彫刻刀形石器	4.11	3.02	1.46	19.52	珪質頁岩(硬質)	被熱
F1-4	P1-4		彫刻刀形石器	4.61	2.13	0.36	3.62	珪質頁岩(硬質)	
F1-5	P1-5		スポール	3.91	1.75	0.31	2.81	珪質頁岩(硬質)	
F1-6	P1-6		スポール	4.92	2.15	0.34	4.53	珪質頁岩(硬質)	
F1-7	P1-7		スポール	3.22	1.14	0.27	1.37	珪質頁岩(硬質)	
F1-8	P1-8		スポール	2.9	1.31	0.59	2.01	珪質頁岩(硬質)	
F1-9	P1-9		スポール	3.75	0.97	0.4	1.11	珪質頁岩(硬質)	
F1-10	P1-10		スポール	3.18	1.74	0.31	1.35	珪質頁岩(硬質)	
F1-11	P1-11		スポール	3.51	1.37	0.38	1.65	珪質頁岩(硬質)	
F1-12	P1-12		スポール	1.7	1.17	0.37	0.54	珪質頁岩(硬質)	
F1-14	P1-13		スポール	2.29	1.34	0.22	0.84	珪質頁岩(硬質)	
F1-13	P1-14		スポール	2.42	1.19	0.44	0.85	珪質頁岩(硬質)	
F1-15	P1-15		スポール	3.65	1.35	0.37	1.48	珪質頁岩(硬質)	
F1-16	P1-16		剥片	2.63	1.47	0.32	1.25	黒曜石	
F1-17	P1-17		剥片	1.21	1.72	0.29	0.68	黒曜石	
F1-18	P1-18		剥片	2.42	2.19	0.51	2.45	珪質頁岩(硬質)	
F2-1	P2-1		剥片	2.86	1.5	0.37	1.52	珪質頁岩(硬質)	被熱
F2-3	P2-2		剥片	5.83	6.06	1.9	87.75	石英	
F2-2	P2-3		剥片	3.54	3.03	0.6	5.27	珪質頁岩(硬質)	
	P2-4		剥片	5.53	7.79	2.67	106.17	流紋岩	
F2-4	P2-5		剥片	5.93	6.76	1.9	72.79	流紋岩	
	P3-1		石核	7.38	8.18	3.37	249.41	流紋岩	
F3-1	P3-2	Ⅵ区北側	尖頭器	3.17	1.64	0.47	2.46	珪質頁岩(硬質)	
F3-2	P3-3		尖頭器	4.84	2.51	0.73	8.57	珪質頁岩(硬質)	被熱
F3-3	P3-4		尖頭器(未)	3.06	3.27	1.06	12.33	流紋岩	
F3-4	P4-1	Ⅵ区南東端	二次加工ある剥片	5.6	5	2.41	59.19	メノウ	
F3-5	P4-2	Ⅵ区西	石刃	4.38	1.32	0.32	2.33	珪質頁岩(硬質)	
F3-6	P4-3		二次加工ある剥片	4.21	3.09	0.99	11.5	メノウ	
F3-8	P4-4	Ⅵ区造成中	台形様石器	2.37	1.74	0.6	2.39	玉髄	
F3-7	P4-5		ナイフ形石器	2.46	1.73	0.9	3.28	玉髄	
F3-9	P4-6		尖頭器(未)	3.04	2.92	0.89	7.51	流紋岩	
F3-10	P4-7		彫刻刀形石器	2.44	2.07	0.67	2.28	チャート	
F4-1	P4-8		彫刻刀形石器	2.84	1.62	0.74	2.01	メノウ	
F4-2	P4-9		スポール	1.94	1.06	0.45	0.82	珪質頁岩(硬質)	
F4-3	P4-10		楔形石器	3.6	0.84	0.59	1.79	チャート	
F4-4	P4-11		楔形石器	2.18	1.48	0.84	3.12	メノウ	
F4-5	P4-12		剥片(楔)	3.29	0.99	0.5	1.37	メノウ	
F4-6	P4-13		剥片(楔)	2.85	1.2	0.31	1.06	メノウ	
F4-9	P4-14		石刃	3.49	1.62	0.6	4.39	珪質頁岩(硬質)	
F4-7	P5-1		剥片(楔)	2.88	3.04	1.29	12.21	珪質頁岩(硬質)	
F4-8	P5-2		剥片(楔)	4.16	2.7	1.38	13.54	流紋岩	
F4-10	P5-3		石刃	3.72	1.63	0.86	4.9	流紋岩	
F4-11	P5-4		石刃	4.67	1.96	0.75	7.41	流紋岩	
F4-12	P5-5		剥片	3.04	1.85	0.34	1.64	珪質頁岩(硬質)	
F4-13	P5-6		剥片	3.27	1.35	0.4	1.41	凝灰質頁岩	
F4-14	P5-7		剥片	3.17	1.11	1.03	2.54	メノウ	
F4-15	P5-8		剥片	4.19	2.78	1.13	11.42	メノウ	
F4-16	P5-9		剥片	3.67	2	0.62	4.46	チャート	
F4-17	P5-10		剥片	3.33	2.21	0.57	4.66	チャート	
F5-1	P5-11		剥片	2.06	2.06	0.24	0.86	凝灰質頁岩	
F5-2	P5-12		剥片	2.15	2.88	0.79	4.48	珪質頁岩(硬質)	
F5-3	P5-13		剥片	2.82	2.15	1.5	3.5	メノウ	
F5-4	P5-14		剥片	5.23	4.81	1.95	33.39	砂岩	

付表２　石器観察表

図No.	写真No.	出土地点	器種	長さ(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重(g)	石材	備考
F5-6	P5-15	Ⅵ区造成中	剥片	4.34	3.84	0.98	19.45	安山岩	
F5-5	P6-1		剥片	4.46	2.85	1.02	11.68	流紋岩	
F5-7	P6-2		剥片	4.89	3.16	1.22	18.48	石英	
F5-9	P6-3		石核	4.07	3.52	1.9	23.55	メノウ	
F5-8	P6-4		石核	3.02	3.01	1.83	18.29	チャート	
	P6-5		剥片	4.04	4.12	2.16	36.54	砂岩	
	P6-6		ハンマー	9.61	5.75	5.82	455.48	石英	被熱
F6-1	P7-1	Ⅰ区いわき市発掘区周辺	ナイフ形石器	3.73	1.68	0.84	4.45	珪質頁岩(硬質)	衝撃剥離(小)
F6-2	P7-2		彫刻刀形石器	3.27	2.67	0.79	4.59	珪質頁岩(硬質)	
F6-3	P7-3		石刃	3.9	2.06	0.73	7.82	珪質頁岩(硬質)	
F6-4	P7-4		エンド・スクレイパー	2.83	3.73	0.82	7.73	珪質頁岩(硬質)	
F6-5	P7-5		二次加工ある剥片	2.68	1.89	0.47	2.38	メノウ	
F6-6	P7-6		楔形石器	3.64	1.81	0.74	4.31	メノウ	
F6-7	P7-7		二次加工ある剥片	3.23	2.14	1.11	6.85	石英	
F6-8	P7-8		剥片	2.63	1.69	0.95	4.11	メノウ	
F6-9	P7-9		剥片	1.78	1.48	0.53	1.41	石英	
F6-10	P7-10		剥片	5.1	4.61	1.21	28.1	安山岩	
F7-1	P7-11	Ⅰ区北側	剥片	5.52	5.16	2.61	63.32	流紋岩	
F7-2	P8-1		剥片	8.5	6.4	2.1	103.25	安山岩	被熱
F7-3	P8-3		石核	3.76	3.91	2.68	42.54	チャート	
	P8-4		石核	3.8	5.76	3.49	81.08	珪質凝灰岩	
F8-1	P9-1		石核	3.41	3.2	2.24	26.73	チャート	
F8-3	P9-3	Ⅱ区	石刃	3.68	1.59	0.71	3.12	黒曜石	
F8-2	P9-2		石刃	5.28	2.15	0.86	8.46	凝灰質頁岩	
F8-4	P9-4	Ⅴ区	尖頭器	3.33	1.32	0.44	2.05	石英	
F8-5	P9-5		尖頭器(未)	4.17	3.91	0.97	9.89	珪質頁岩(硬質)	被熱
F8-9	P9-9		スポール	3.2	1.2	1	4.19	珪質頁岩(硬質)	被熱
F8-7	P9-7		楔形石器	4.16	2.75	1.03	9.84	珪質頁岩(硬質)	
F8-6	P9-6		楔形石器	4.11	4.51	1.12	20.95	凝灰質頁岩	
F8-8	P9-8		楔形石器	3.13	1.64	1.09	4.92	チャート	
F8-10	P9-11		石刃	3.48	1.32	0.36	1.51	珪質頁岩(硬質)	
F8-11	P9-13		石刃	4.67	1.82	0.44	6.2	珪質頁岩(硬質)	
F8-12	P9-12		石刃	2.62	1.07	0.24	0.78	珪質頁岩(硬質)	
F8-13	P10-6		剥片	2.46	1.42	0.54	1.81	珪質頁岩(硬質)	
F9-1	P10-1		石刃	7.82	3.67	1.86	50.98	石英	
F9-2	P10-2		剥片	3.94	2.38	0.4	3.61	メノウ	
F9-3	P10-3		剥片	2.53	1.98	0.38	2	碧玉	
F9-4	P9-10		剥片(楔)	2.66	2.44	0.75	4.72	メノウ	
F9-5	P9-13		剥片	3.98	2.66	0.65	6.24	珪質凝灰岩	
F9-6	P9-14		剥片	3.8	2.19	0.59	3.73	凝灰質頁岩	
F9-7	P10-9		二次加工ある剥片	2.77	2.79	1.28	7.9	メノウ	
F9-8	P10-7		剥片	3.42	2.69	0.9	8.68	安山岩	
F9-9	P10-8		剥片	3.32	4.11	1.12	16.6	メノウ	
	P10-10		剥片	4.07	3.95	0.84	16.25	流紋岩	

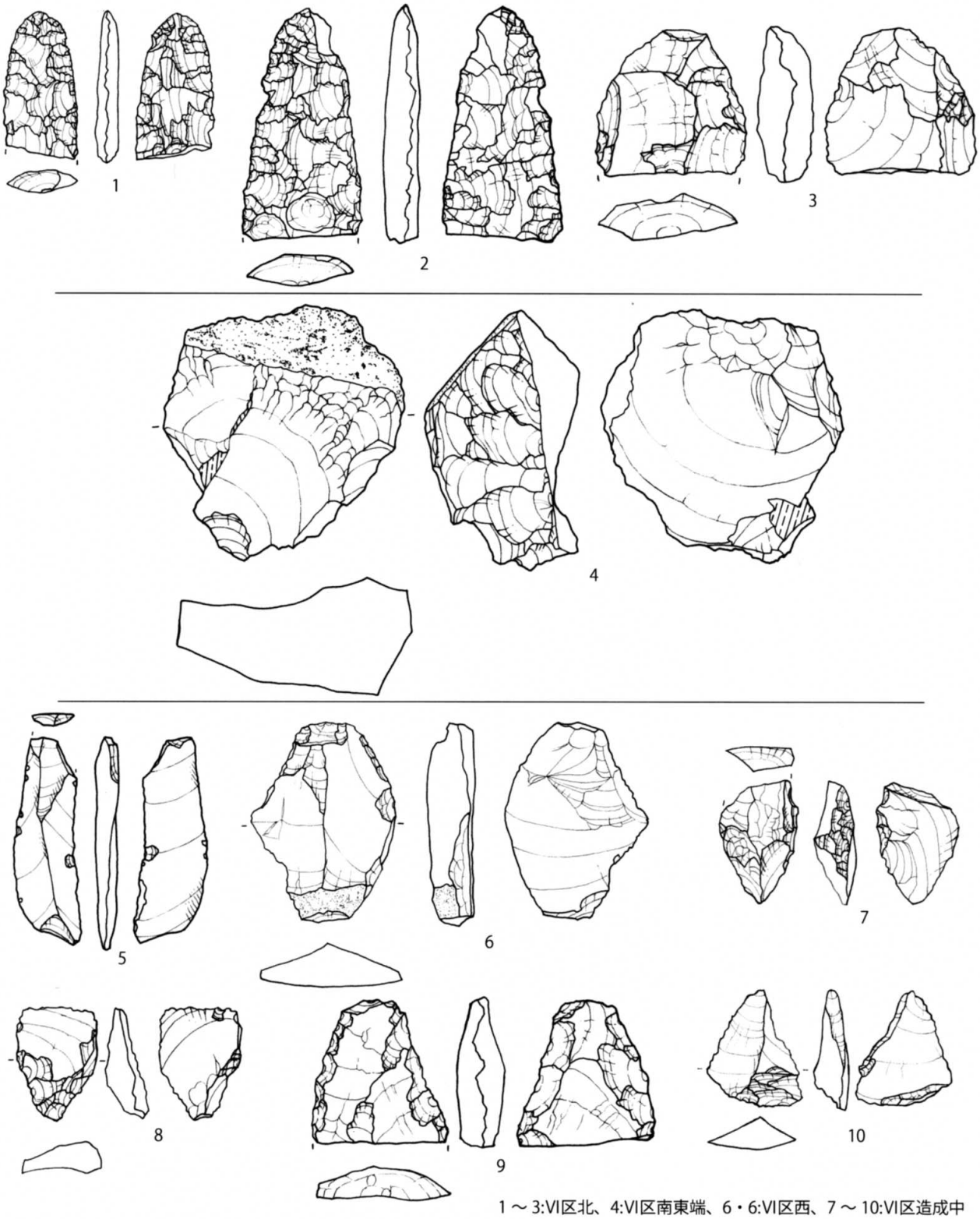
図版１　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区東北大発掘区北側採集資料　　Scale=4:5

Fig.1　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



図版 2　大畑 K 遺跡VI区東北大発掘区北側採集資料　　Scale=4:5

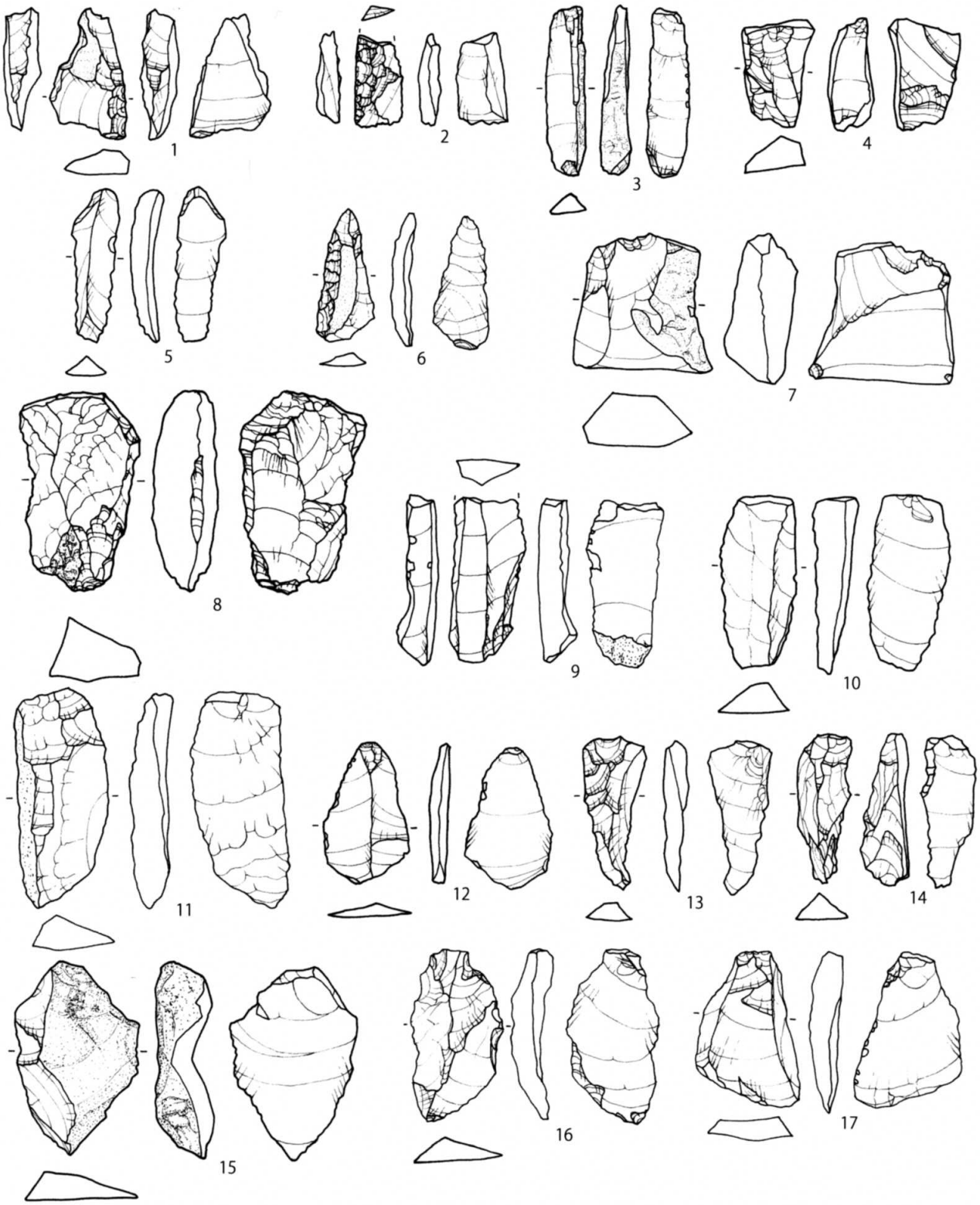
Fig.2　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



1 ～ 3:VI区北、4:VI区南東端、6・6:VI区西、7 ～ 10:VI区造成中

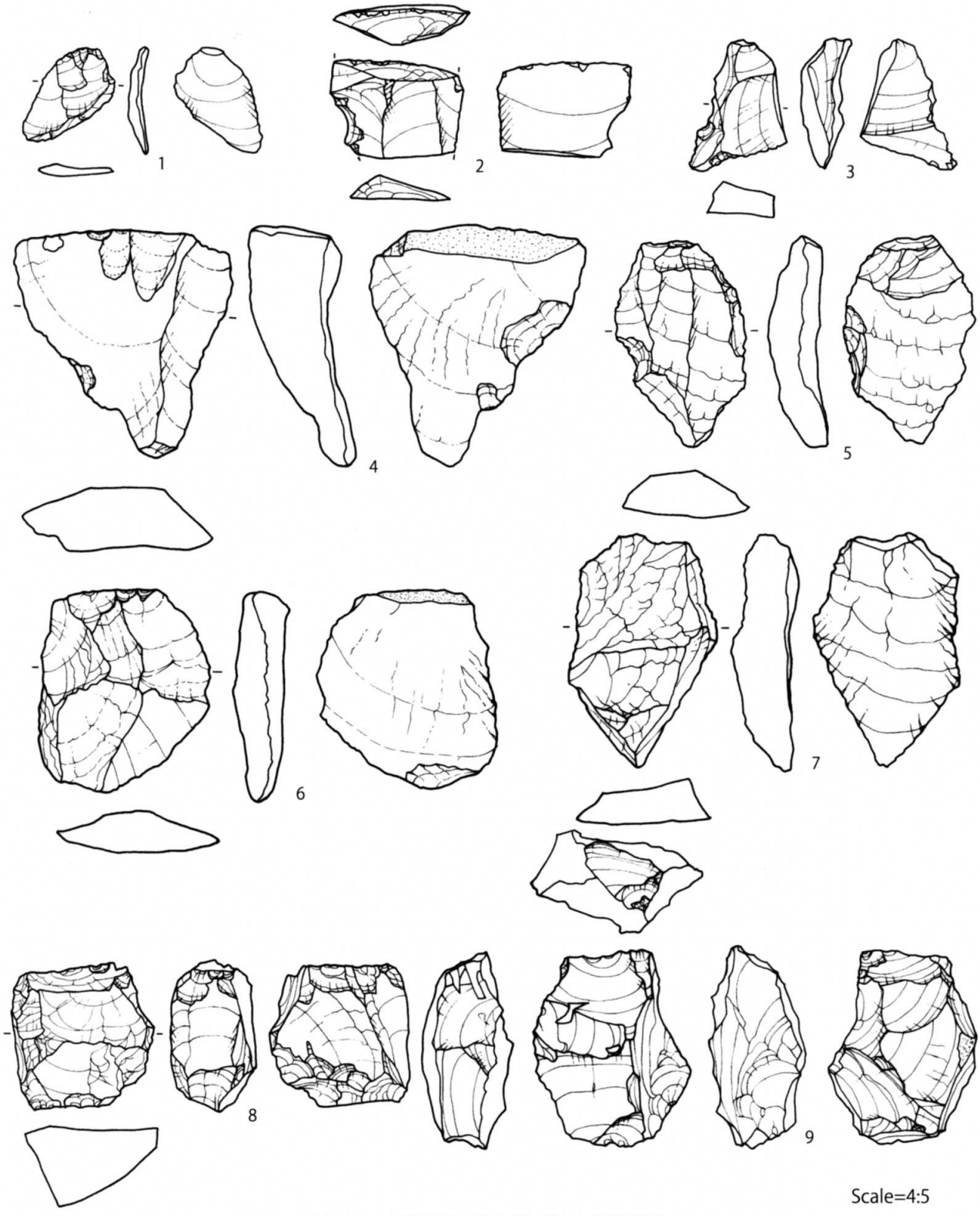
図版 3　大畑 K 遺跡VI区採集資料　　Scale=4:5

Fig.3　Lithic artifacts cllected from the Ohata-K site



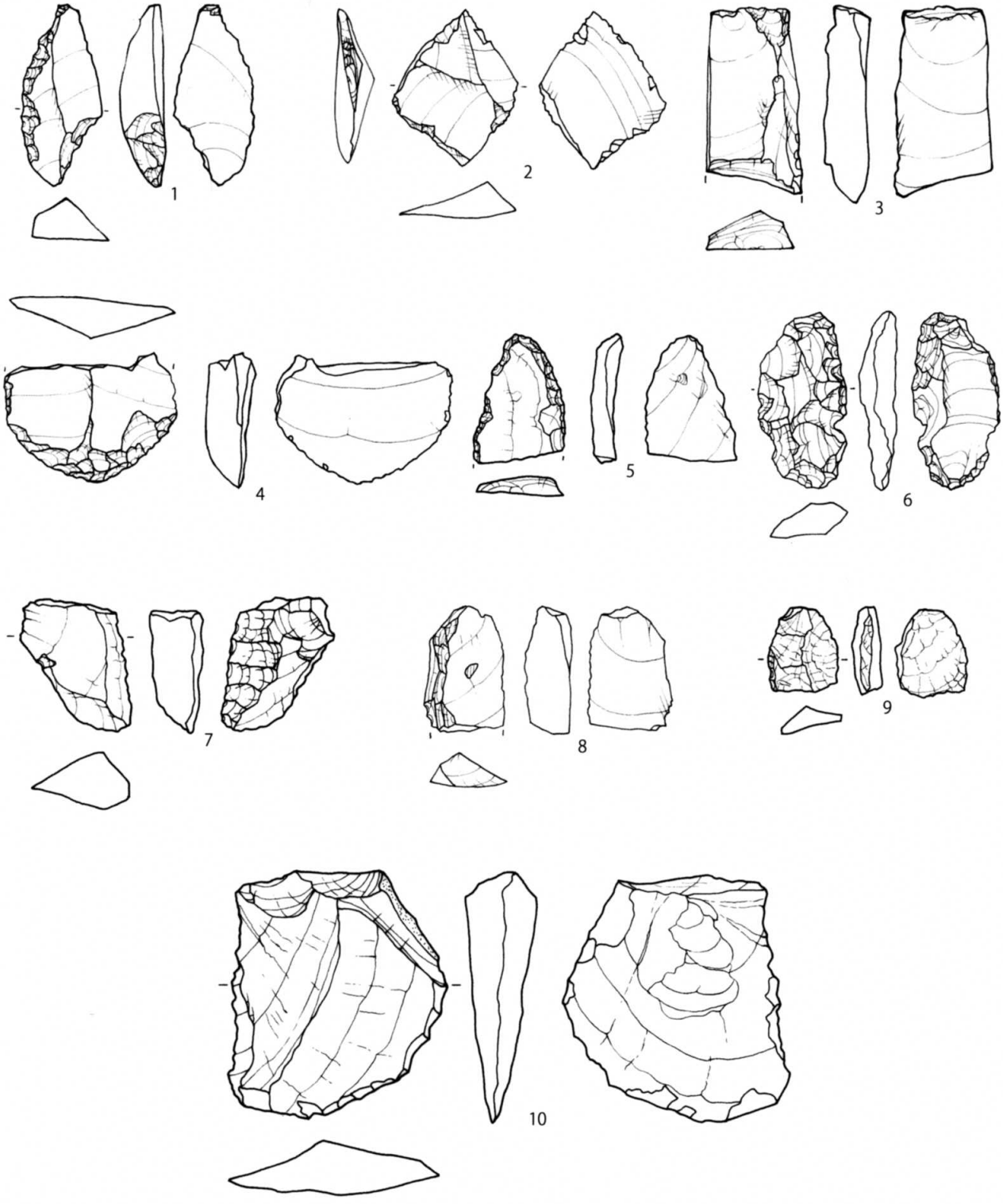
図版 4　大畑K遺跡VI区（造成中）採集資料　　Scale=4:5

Fig.4　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



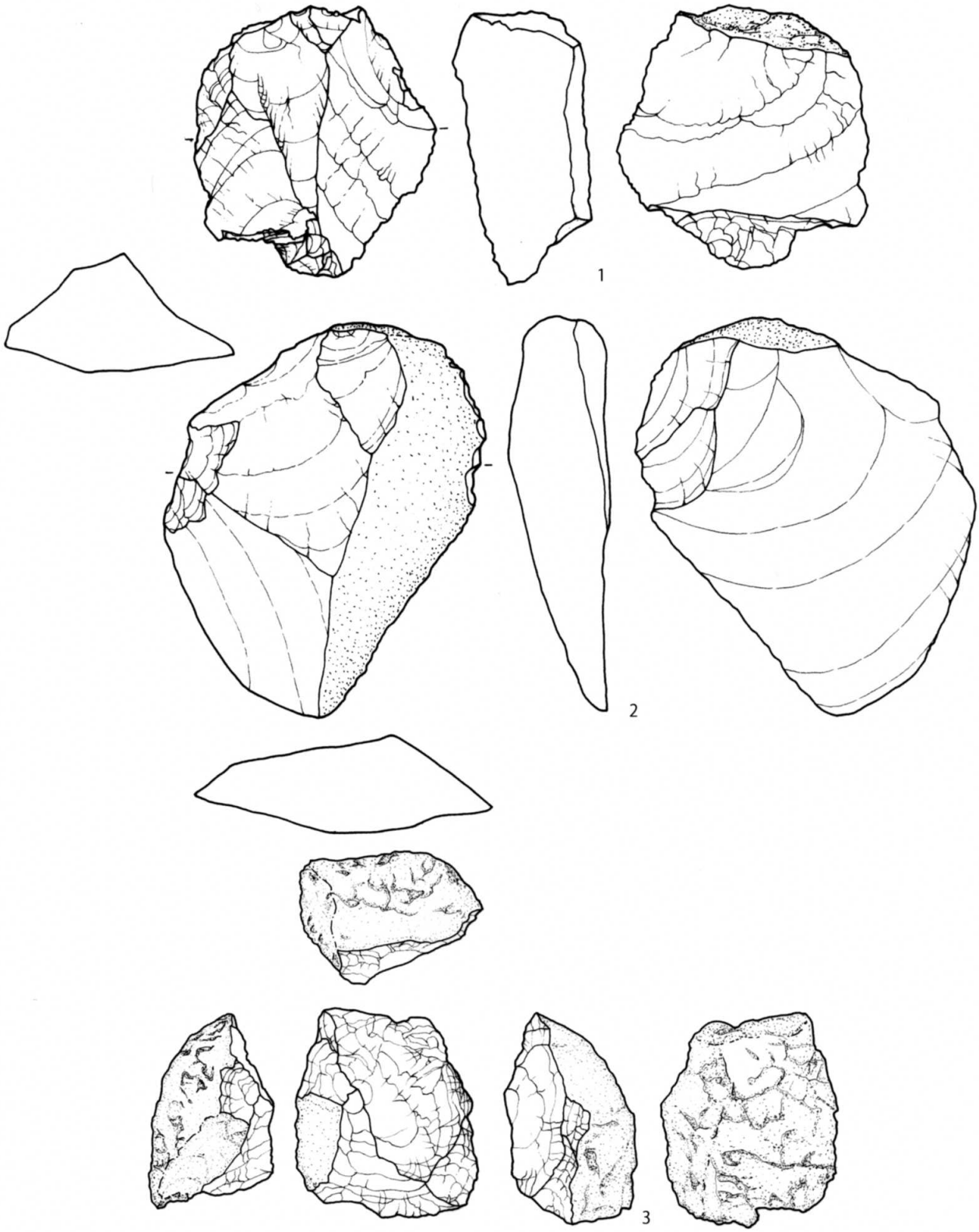
図版 5　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区（造成中）採集資料

Fig.5　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



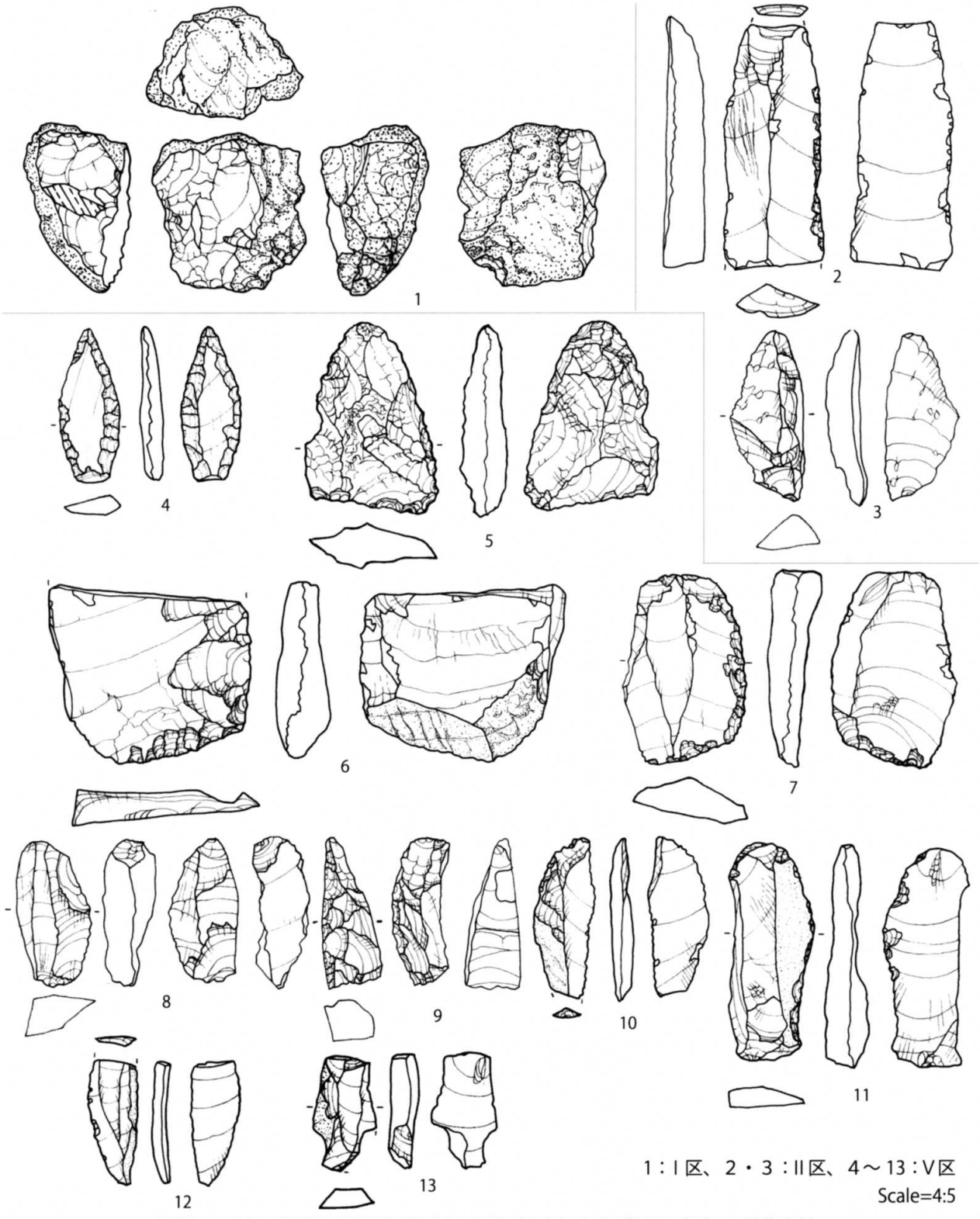
図版 6　大畑 K 遺跡 I 区・いわき市発掘区付近採集資料　　Scale=4:5

Fig.6　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



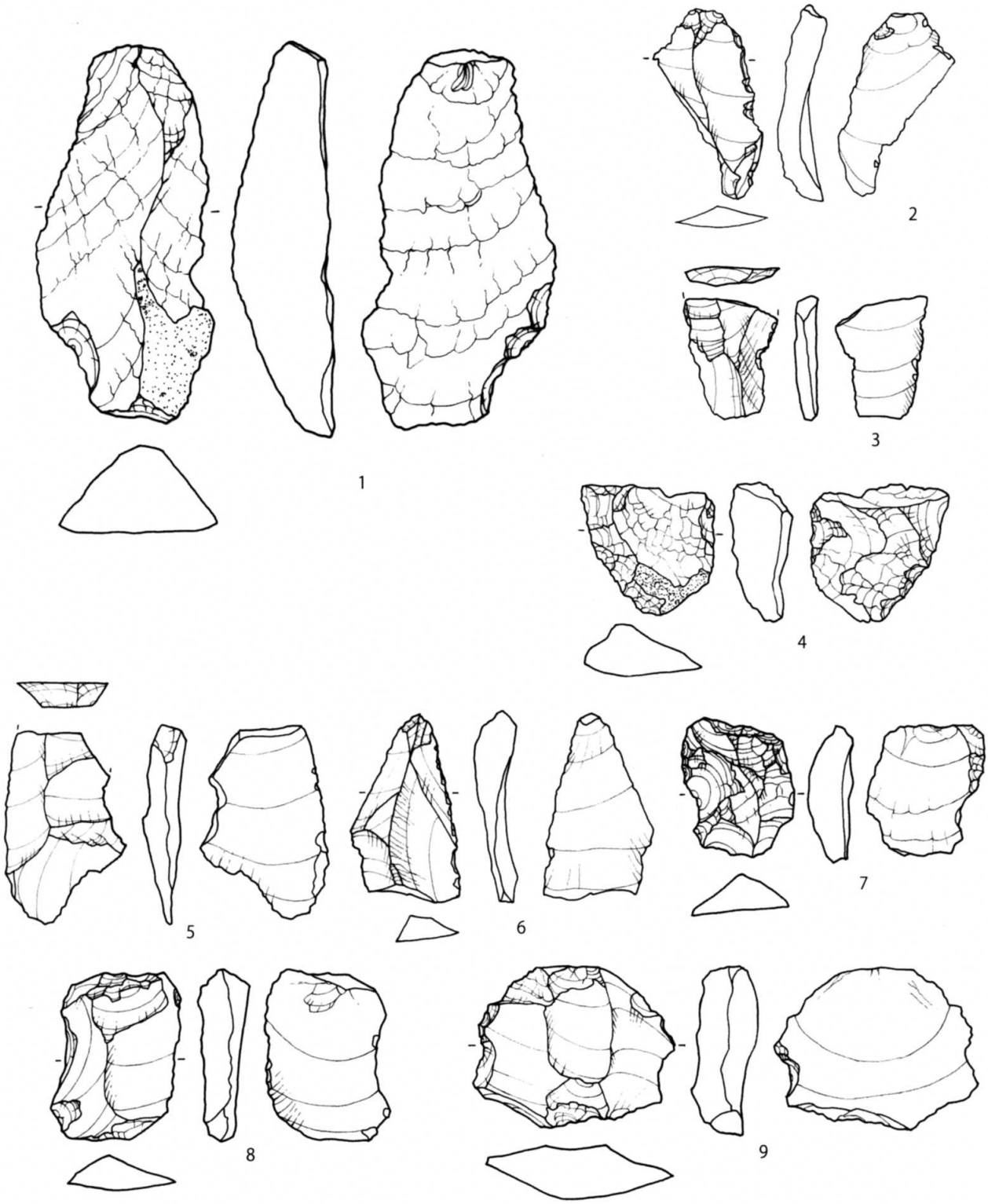
図版 7　大畑 K 遺跡 I 区北側採集資料　　Scale=4:5

Fig.7　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



図版８　大畑Ｋ遺跡Ⅰ区北側（左上）・Ⅱ区（右上）およびⅤ区（下）の採集資料

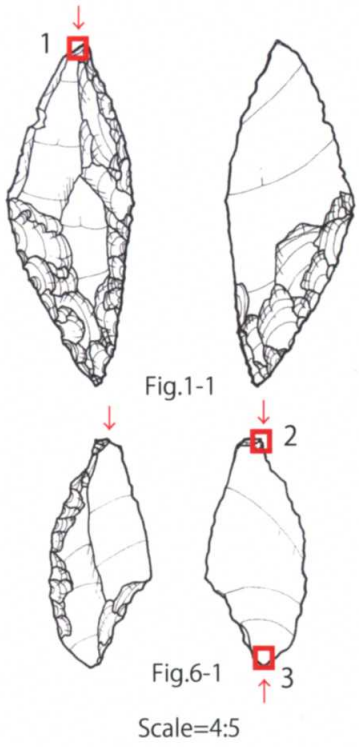
Fig.8　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



図版 9　大畑 K 遺跡 V 区採集資料　　Scale=4:5

Fig.9　Lithic artifacts cllected from the Ohata-K site

1　先端部からの剥離痕



2　先端部からの剥離痕

3　基部からの剥離痕

図版 10　大畑K遺跡の使用痕分析

Fig.10　Use wear analysis of Lithic artifacts collected from the Ohata-K site

1　側縁の微小剥離痕

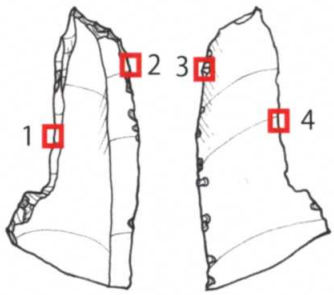


Fig.1-4

2　側縁の微小剥離痕

3　側縁の微小剥離痕

4　側縁の微小剥離痕

5　微小剥離痕と不鮮明な光沢

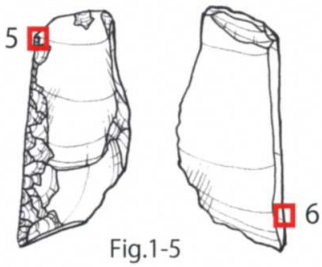


Fig.1-5

Scale=4:5

6　輝斑のような光沢

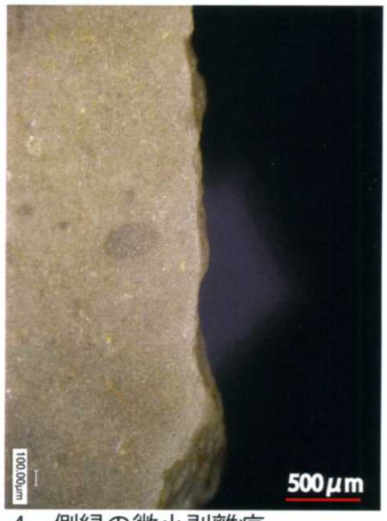
図版 11　大畑K遺跡の使用痕分析

Fig.11　Use wear analysis of Lithic artifacts collected from the Ohata-K site

1　輝斑

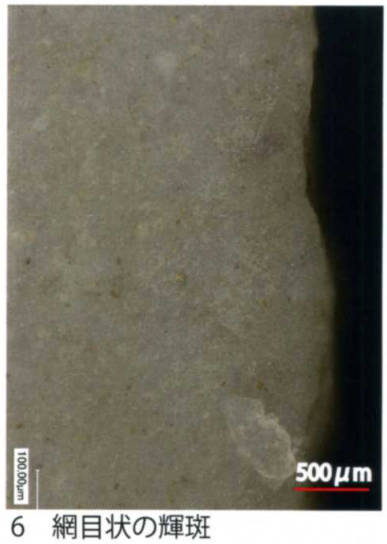
2　輝斑

3　縁辺の潰れとパッチ状光沢



4　側縁の微小剥離痕

5　パッチ状光沢



6　網目状の輝斑

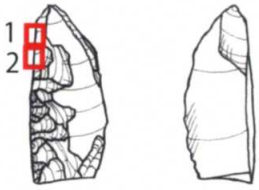


Fig.1-8

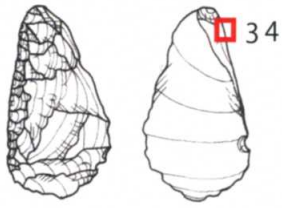


Fig.1-10

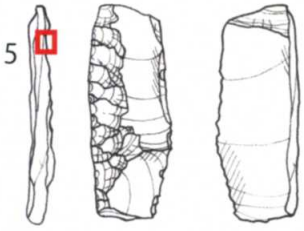


Fig.1-11

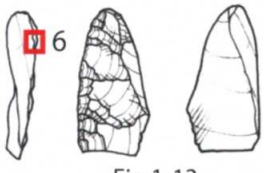
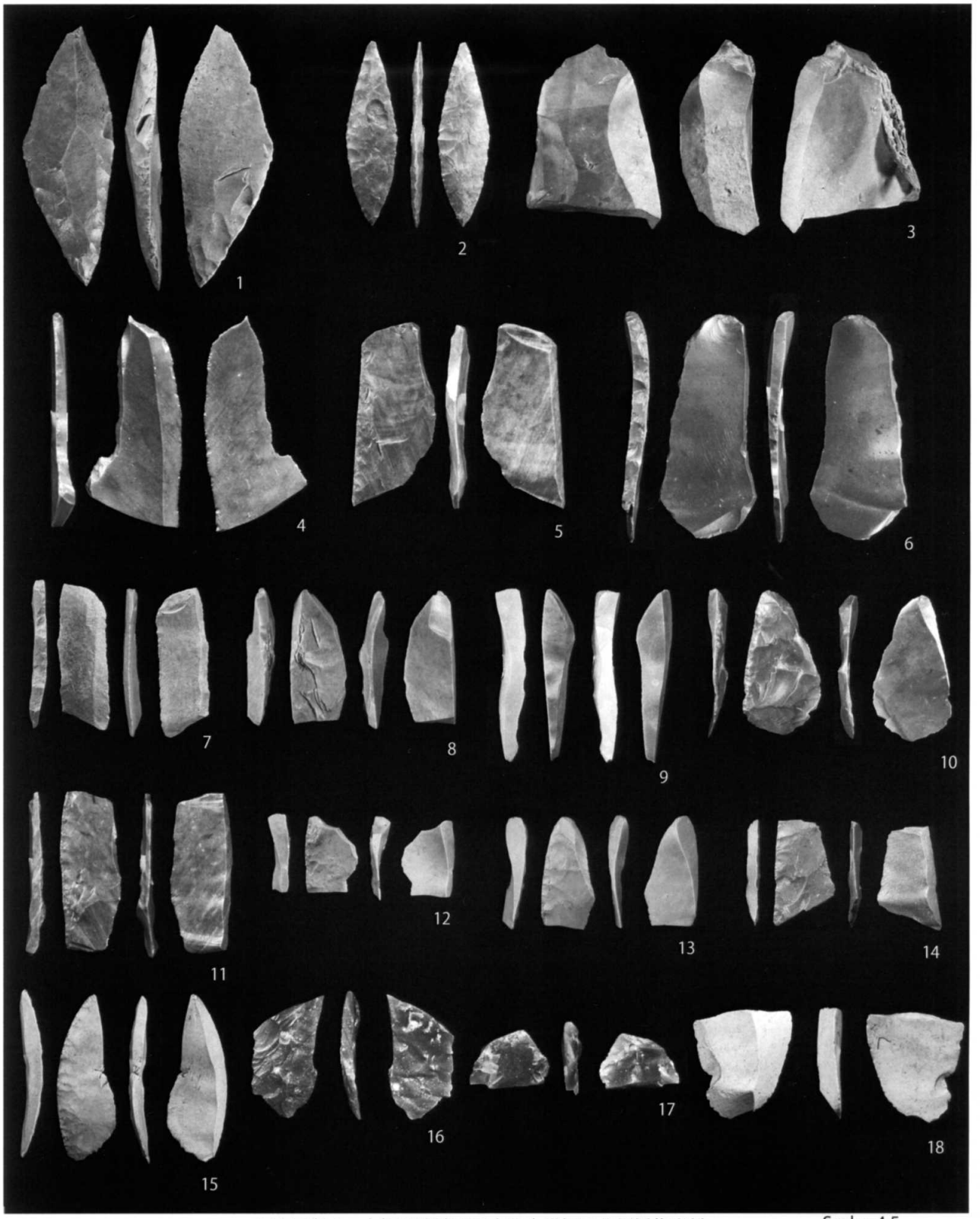


Fig.1-13

Scale=4:5

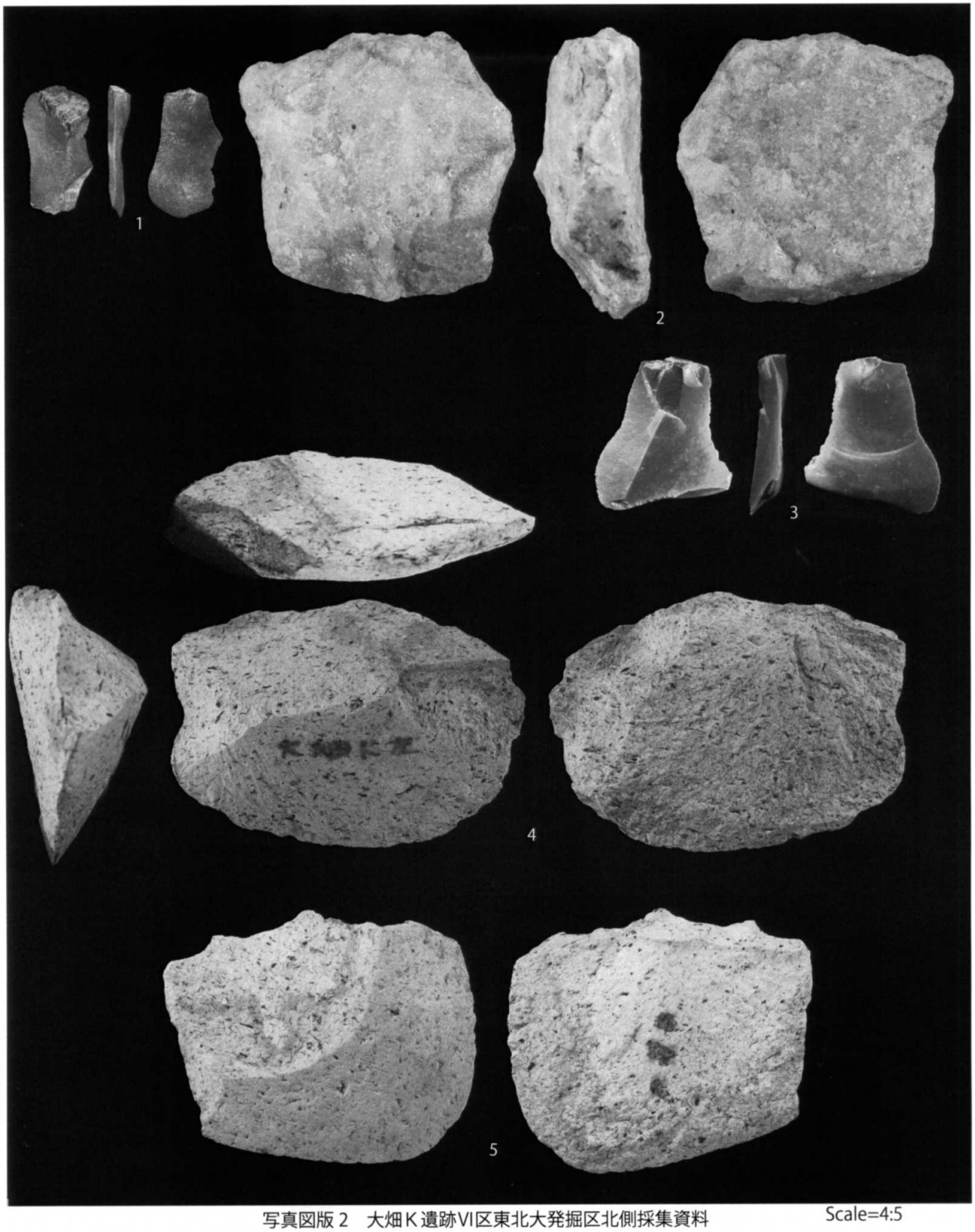
図版 12　大畑Ｋ遺跡の使用痕分析

Fig.12　Use wear analysis of Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



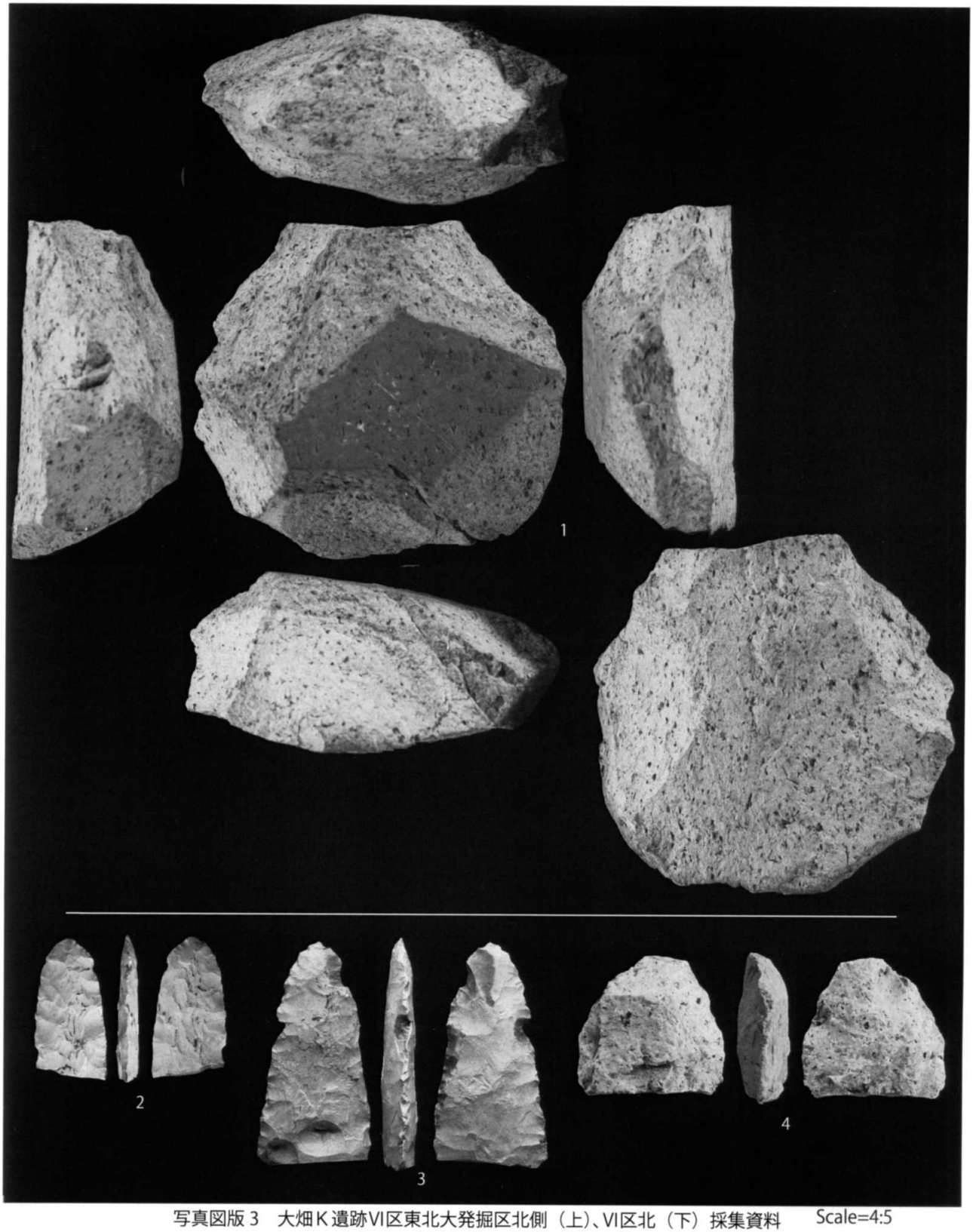
写真図版 1　大畑 K 遺跡VI区東北大発掘区北側採集資料　Scale=4:5

Plate1　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



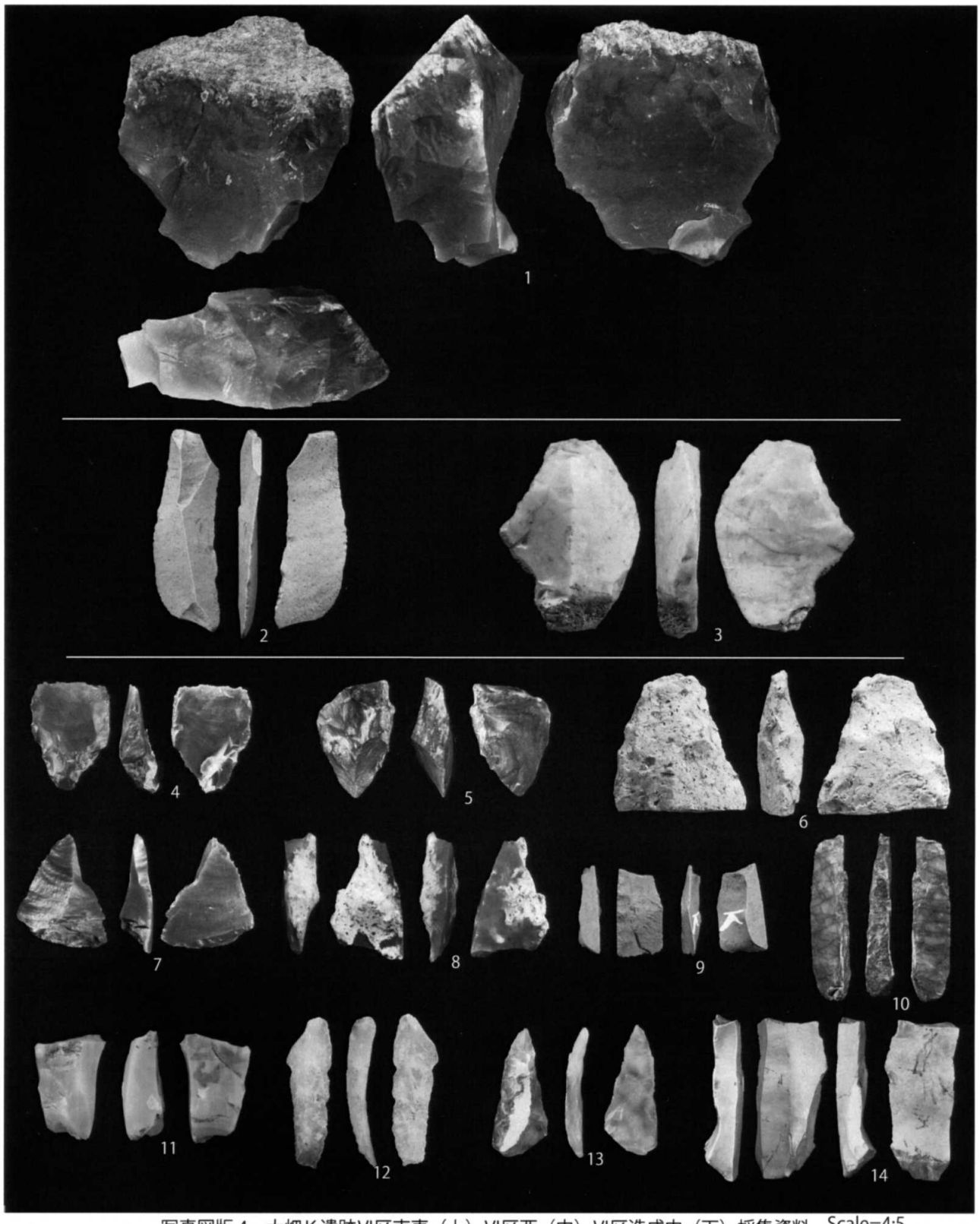
写真図版 2　大畑Ｋ遺跡VI区東北大発掘区北側採集資料　Scale=4:5

Plate2　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



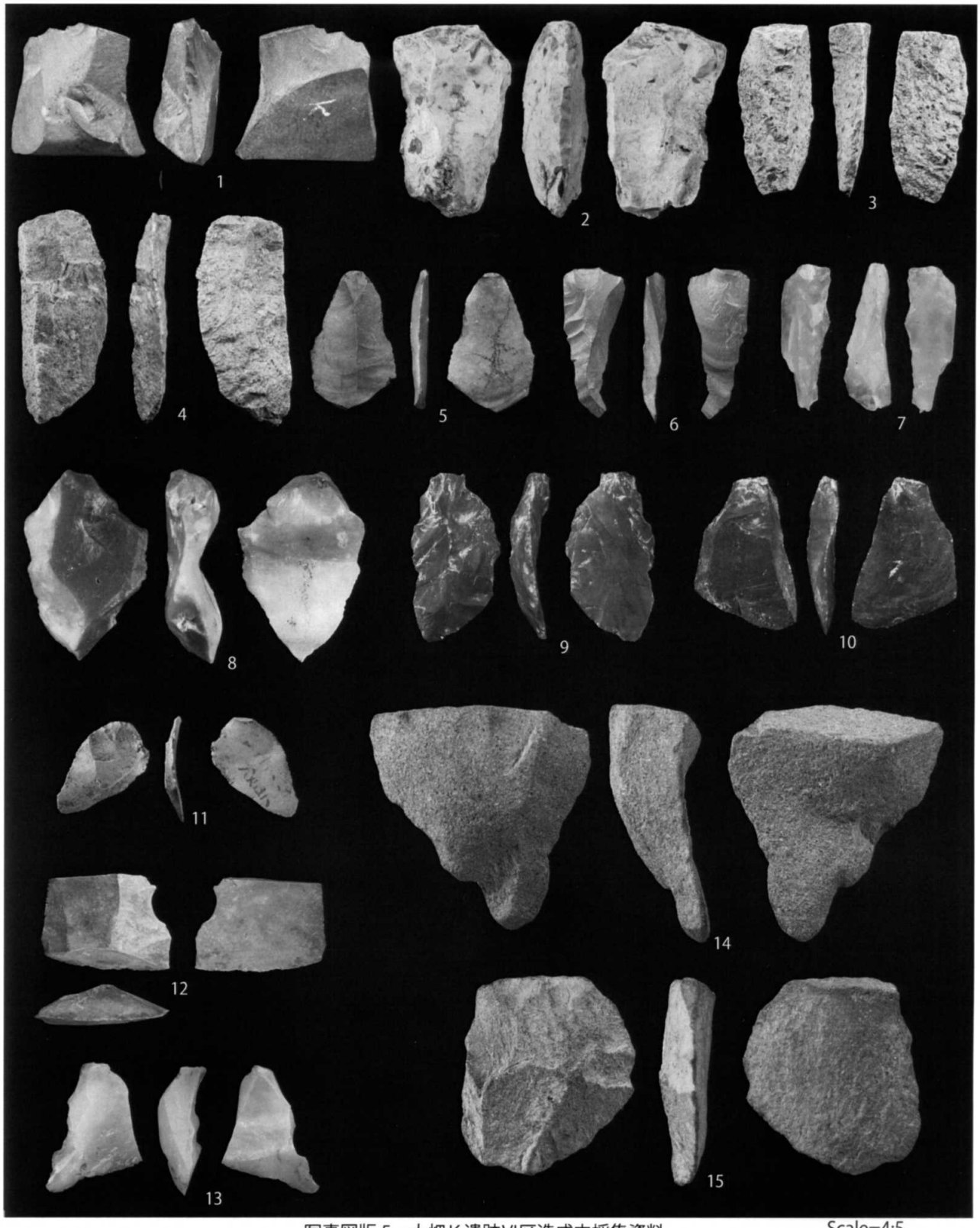
写真図版 3　大畑 K 遺跡Ⅵ区東北大発掘区北側（上）、Ⅵ区北（下）採集資料　Scale=4:5

Plate3　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



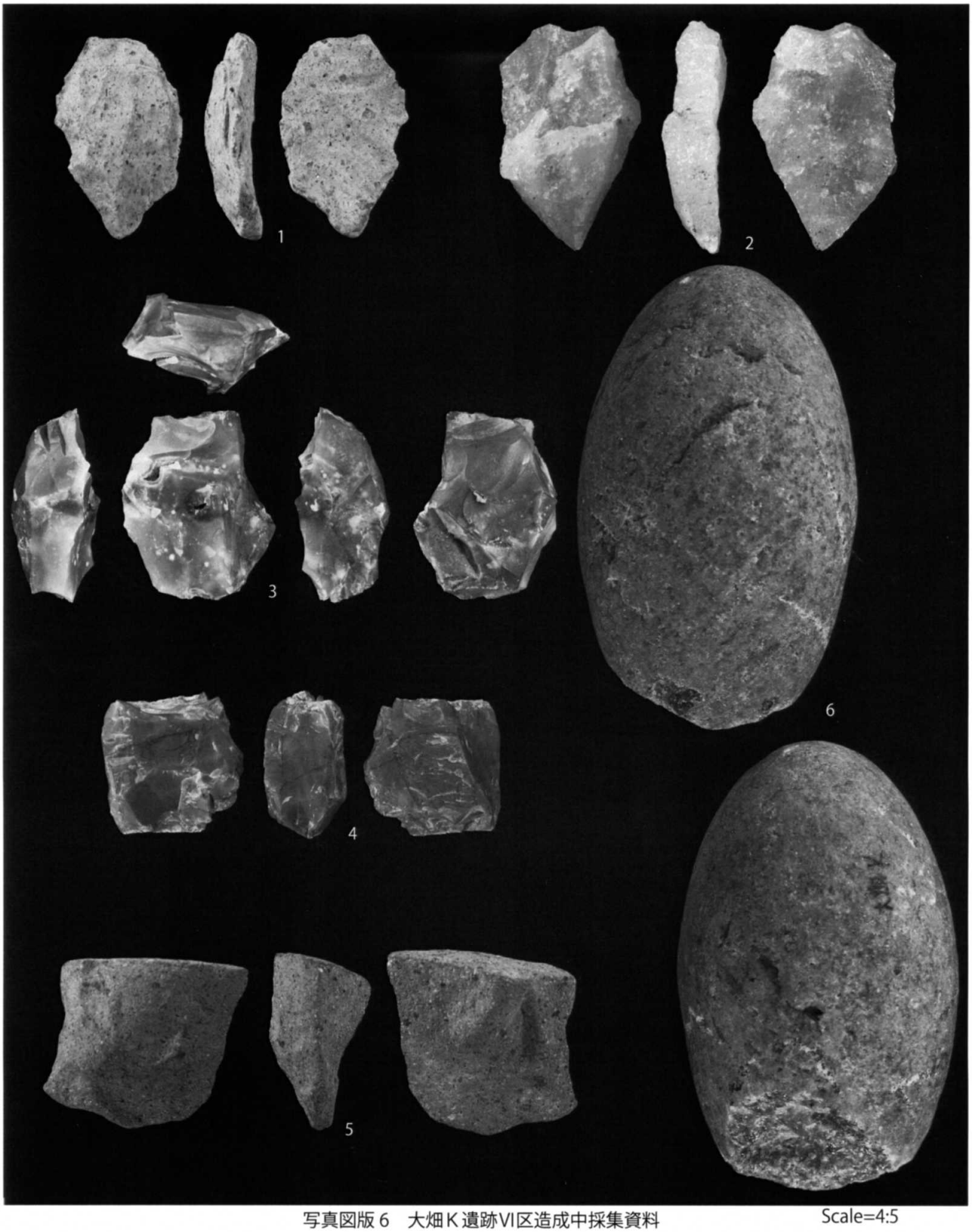
写真図版４　大畑Ｋ遺跡Ⅵ区南東（上）、Ⅵ区西（中）、Ⅵ区造成中（下）採集資料　Scale=4:5

Plate4　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



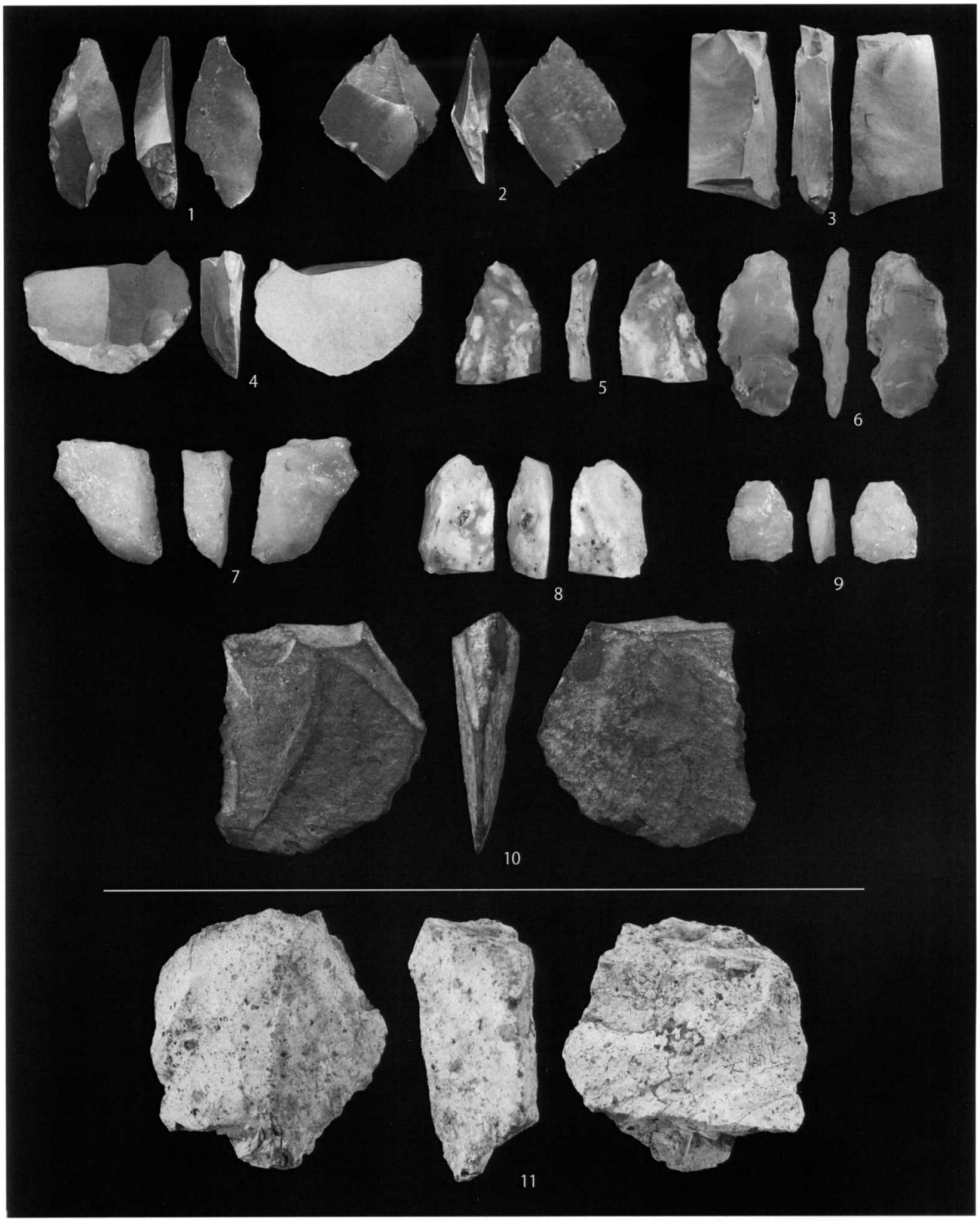
写真図版 5　大畑K遺跡VI区造成中採集資料　Scale=4:5

Plate5　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



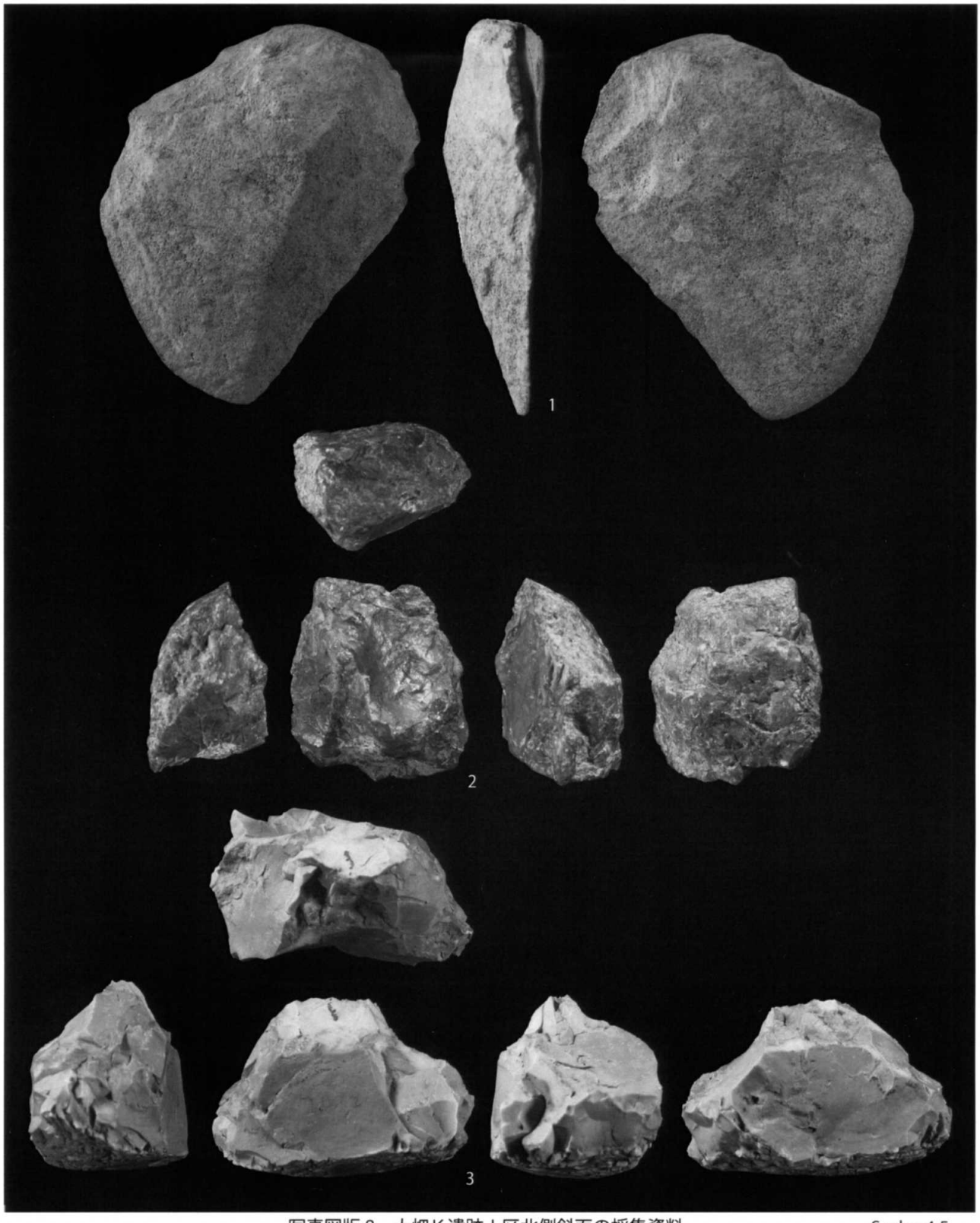
写真図版 6　大畑K遺跡VI区造成中採集資料　Scale=4:5

Plate6　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



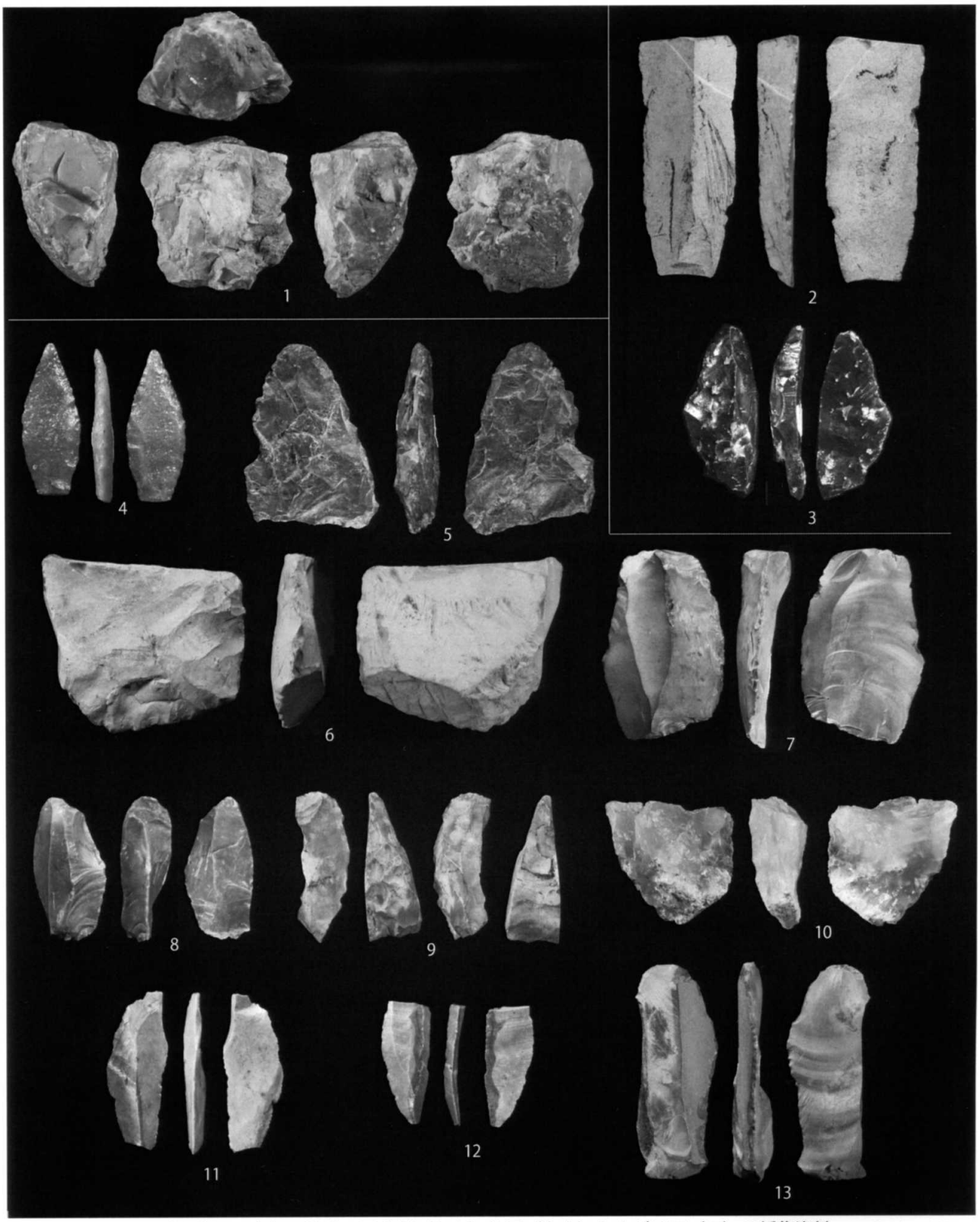
写真図版７　大畑Ｋ遺跡Ⅰ区いわき市発掘区周辺（上）とⅠ区北側斜面（下）の採集資料　Scale=4:5

Plate7　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



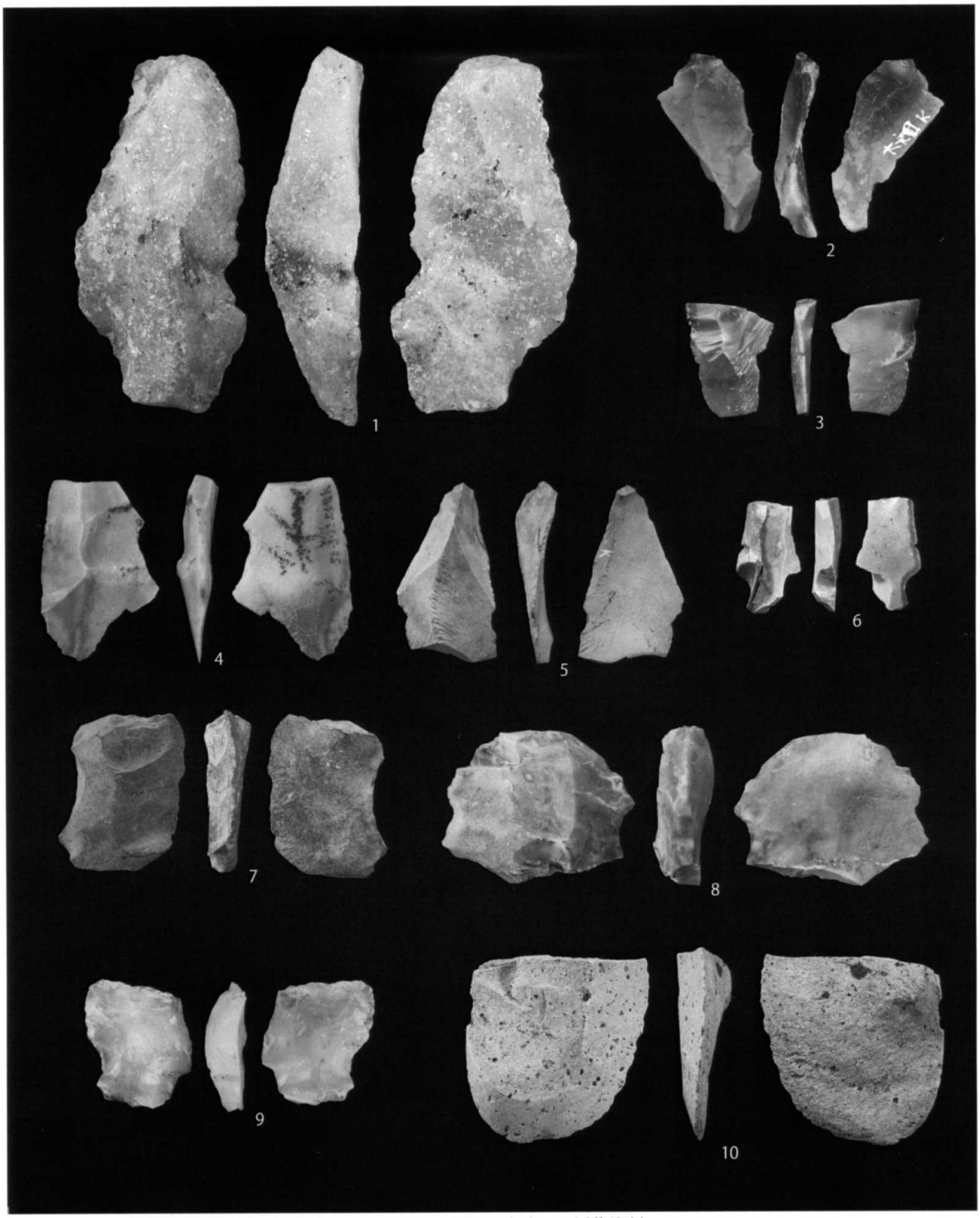
写真図版 8　大畑 K 遺跡 I 区北側斜面の採集資料　　Scale=4:5

Plate8　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



写真図版９　大畑Ｋ遺跡Ⅰ区北側（左上）、Ⅱ区（右上）およびⅤ区（下）の採集資料　　Scale=4:5

Plate9　Lithic artifacts collected from the Ohata-K site



写真図版 10　大畑K遺跡V区採集資料　　Scale=4:5

Plate10　SLithic artifacts collected from the Ohata-K site

大畑遺跡群における旧石器時代資料の研究
－大畑 K 遺跡－

平成 24 年 1 月 20 日印刷
平成 24 年 1 月 20 日発行

編著　　鹿又喜隆　馬目勝典

平成 23 年度科学研究費助成事業
（学術研究助成基金助成金　若手研究（B）
「トライボロジーによる石器機能推定の高確度化とその応用による先史狩猟採集民研究」
研究代表者：鹿又喜隆、課題番号：23720376）

発行　東北大学大学院文学研究科考古学研究室
〒 980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 27-1
電話 022-795-6073

印刷　今野印刷株式会社
〒 984-0011 宮城県仙台市若林区六丁の目西町 2-10
電話 022-288-6123